

月報

反核太平洋

# パンフィカ

●特集号●



被ばく難民  
彼らが海のかなたから発する警告は

ドキュメンタリー映画

## 半減期 ハーフライフ

HALF LIFE

## ●参考地図● マーシャル諸島

◆太平洋における核実験リスト

◆ビキニ環礁とエニウェトク環礁における核実験リスト

## はじめに 1

ドキュメンタリー映画

半減期  
 HALF LIFE  
 ハーフライフ

内容紹介

2

人物紹介

6

デニス・オロウク監督紹介

9

日本語版製作まで

9

●映画評● 現代をうつしだす鏡 ポール・バイニース 10

もうひとつの主演——放射能 12

放射能でおおわれた島を取材して 豊崎博光 14

“被ばく難民”となったロンゲラップ島民 16  
放射能を逃れて集団移住核実験終了後もつづくミサイル実験・SDI 18  
核兵器開発の踏み台とされるマーシャル諸島

もっと知りたい人のための——図書案内 19

ドキュメンタリー映画

半減期  
 HALF LIFE  
 ハーフライフ

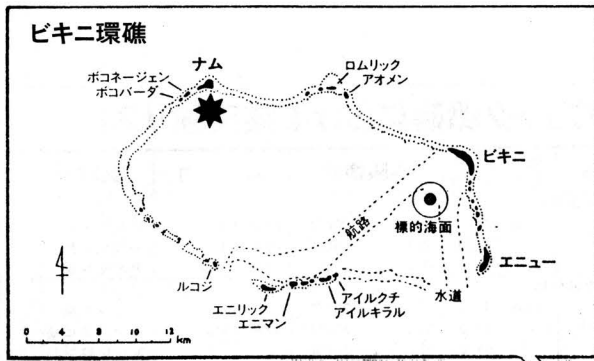
日本語版台本

20

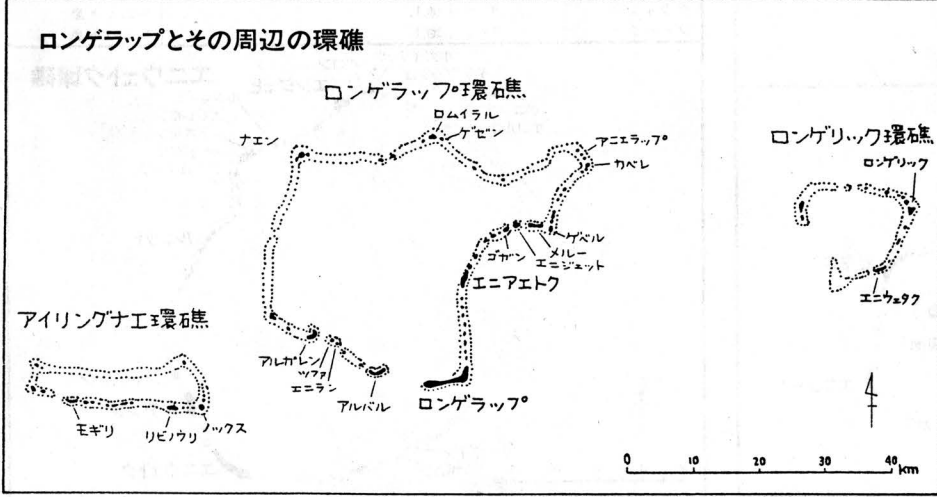
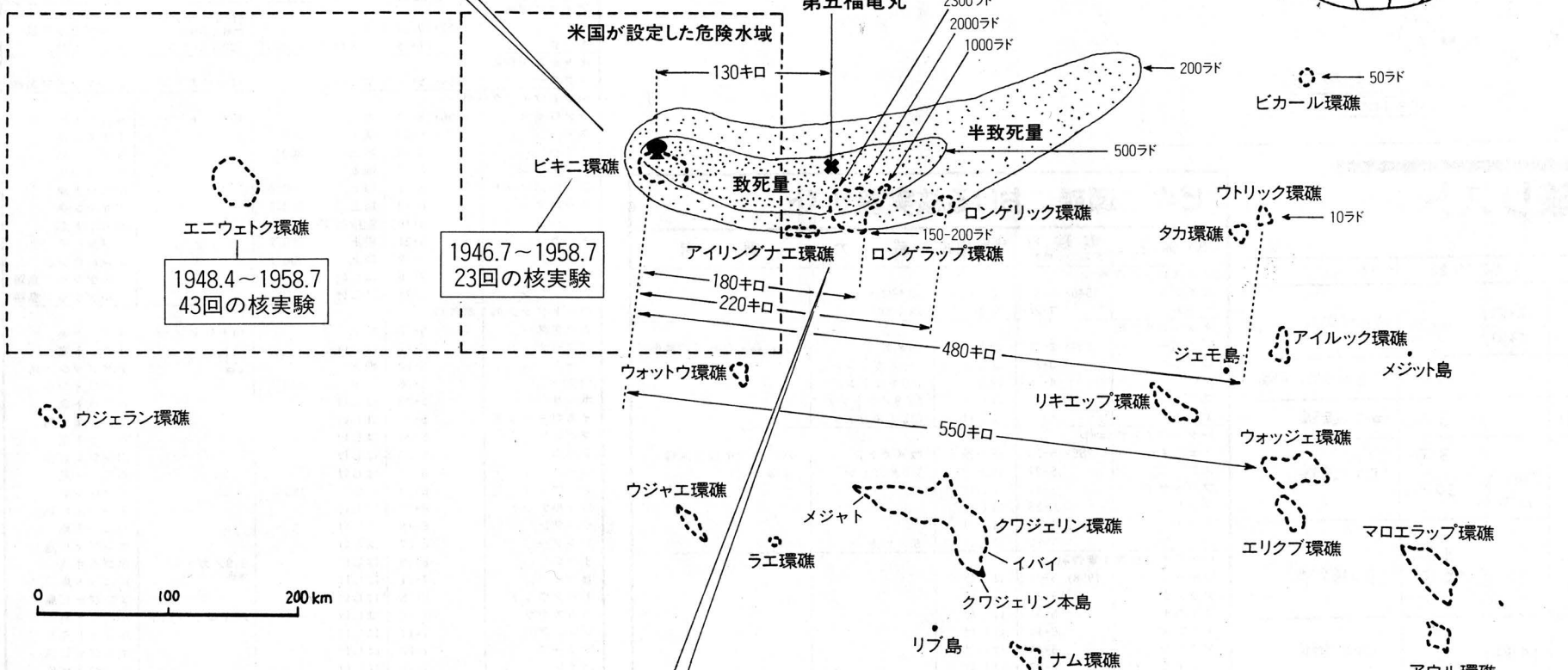
スライド、映画などの紹介 44

【表紙】 19歳のとき白血病でなくなった息子レゴジの写真を手にするロンゲラップ島のミツワ・アンジャインさん。当時、赤ん坊だったレゴジは、初めて降ってきた“雪”に、裸の体に白い粉をいっぱいつけて、はしゃぎまわっていたという。レゴジが18年後に、この日のことがもとで死んでいこうとは、思いもよらぬことだった。  
(写真 デニス・オロウク)





**マーシャル諸島**



まず最初に、マーシャル諸島の地図で、映画のなかにひんぱんに出てくる地名とその位置を確認してください。この地図の左上に位置するエニウェトク環礁とビキニ環礁において実験が行なわれました。

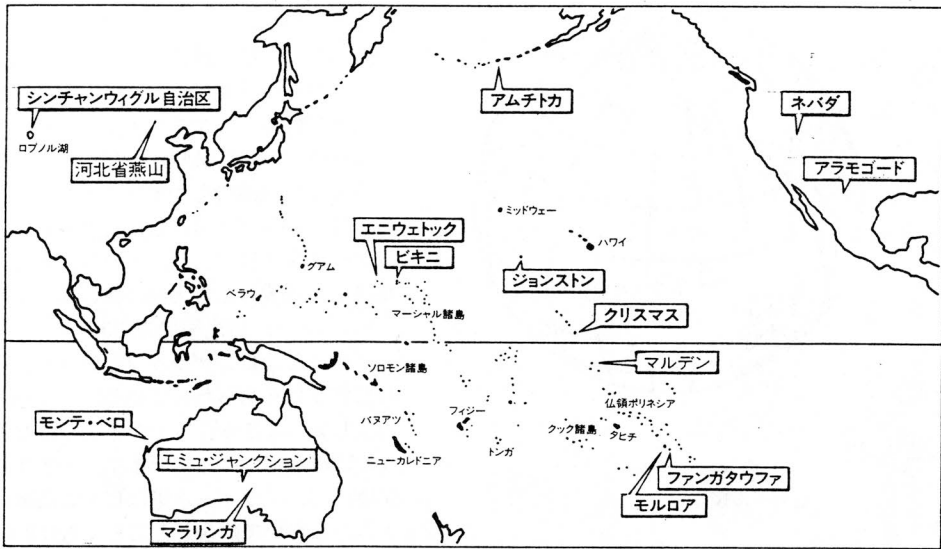
さてこの映画のなかで焦点となっているのは、1954年3月1日に行なわれたブラボー水爆実験でした。それは、今まで地球上で爆発した最大級の核爆発でした(15メガトン、広島原爆の850倍)。

ビキニとかロンゲラップというと、それ自身が島をあらわしているように思われてしましますが、いくつもの小さな島々が環礁を形づくっています。ですから正確には、ブラボー水爆はビキニ環礁のナム島において炸裂したことになります。そして死の灰は、図のように広がっていきました(米原子力委員会による死の灰降下図より作成)。図の半致死量と記されたところで四国と同じ面積になります。

このときロンゲラップ環礁とその属島のアイリングナエ環礁には86人(うち4人は胎児)の住民がいました。そして、その隣のロンゲリック環礁にはアメリカ兵たち28人が観測のため残っていたのです。第五福竜丸はロンゲラップ環礁のすぐ北に位置していました。またウトリックには157人の島民がいました。被ばく島民は総計で243人になります。

被ばくした島民たちは死の灰のなかに放置され、ロンゲラップ住民は3日目に、ウトリックの人たちは4日目にクワジェリン環礁へとつれてゆかれました。

ロンゲラップの人々は3年あまりたった1957年6月に島にもどされます。しかしこのときには、実験のときには島を離れていて被ばくしていなかった人たちもいっしょに島にもどされたのです。そして、これらの人たちは、被ばくした人たちとともに、米国政府からIDカードを渡されて、原子力委員会(1975年以降はエネルギー省)のもとで、現在も毎年、「検診」と呼ばれる調査がつけられています。



## 太平洋における核実験リスト

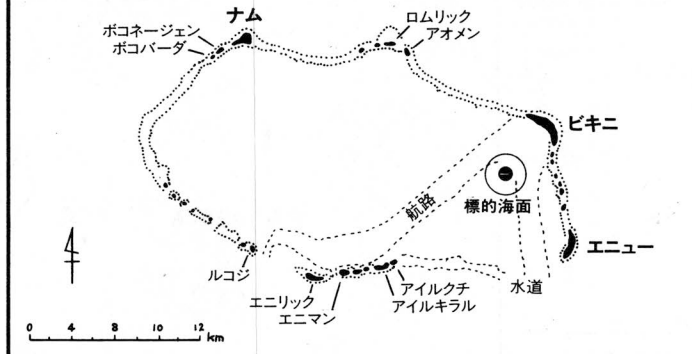
核実験場	実験国	実験期間	実験回数	備考
マーシャル群島 ビキニ環礁 エニウェトク環礁	米国	1946.7 ~ 1958.7 1948.4 ~ 1958.8	23回 } 43回 } <b>66回</b>	空中核実験
中部太平洋 ショーンストーン島	米国	1958.8、62.7~11	<b>12回</b>	高空超高空核実験
ポリネシア列島 アムチトカ島	米国	1965.10、1969.10、1971.11	<b>3回</b>	地下核実験
ライン群島 マルデン島 クリスマス島	イギリス イギリス 米国	1957.5~6 1957.11~1958.9 1962.4~11	3回 } 6回 } 24回 } <b>30回</b>	空中核実験
オーストラリア モンテ・ペロ島 エミュー・ジャンクション マラリンガ	イギリス イギリス イギリス	1952.10、1956.5~6 1953.10 1956.9~1957.10	3回 } 2回 } 7回 } <b>12回</b>	空中核実験
ポリネシア モルロア環礁 ファンガタウファ環礁 モルロア環礁	フランス フランス フランス	1966.7 ~ 1974.9 { 1968.8 { 1975.6 ~ 11 1976.4 ~ 継続中	41回 } 87回 } <b>128回</b> (1987年6月現在)	空中核実験 地下核実験



## ビキニ環礁における核実験リスト

爆弾名	実験日 <small>グリニッジ標準時</small>	実験様式	威力	備考
<b>クロスローズ作戦</b>				
エイブル	1946・6・30	空中投下	23キロトン	
ベーカー	7・24	水中	23キロトン	
<b>キャッスル作戦</b>				
ブラボー	1954・2・28	地上	15メガトン	ナム島・熱核反応装置
ロメオ	3・26	はしけ	(11メガトン)	
クーン	4・6	地上	110キロトン	
ユニオン	4・25	はしけ	(6.9メガトン)	
ヤンキー	5・4	はしけ	(13.5メガトン)	
<b>レッドウィング作戦</b>				
チェロキー	1956・5・20	空中投下	数メガトン	最初の空中投下水爆 水爆
ズニ	5・27	地上	3.5メガトン	
フラッセド	6・11	はしけ		
ダコタ	6・25	はしけ		
ナバホ	7・10	はしけ		
チューワ	7・20	はしけ	5メガトン	
<b>ハードタック第1章作戦</b>				
フェール	1958・5・11	はしけ		
ナツメグ	5・21	はしけ		
サイカモール	5・31	はしけ		
メイブル	6・10	はしけ		
アスペン	6・14	はしけ		
レッドウッド	6・27	はしけ		
ヒッコリー	6・29	はしけ		
シーダー	7・2	はしけ		
ポブラ	7・12	はしけ		
ジャーニバー	7・22	はしけ		

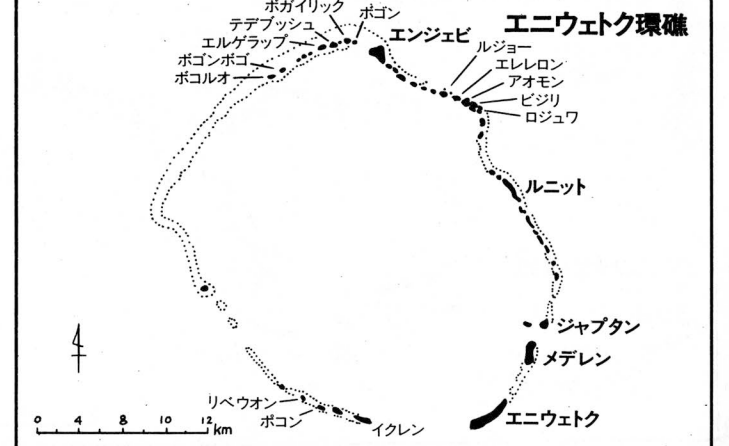
### ビキニ環礁



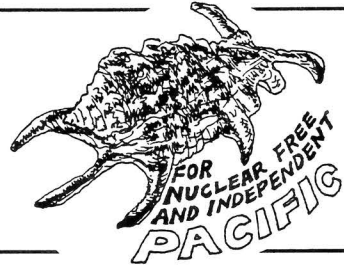
## エニウェトク環礁における核実験リスト

爆弾名	実験日 <small>グリニッジ標準時</small>	実験様式	威力	実験場所	
<b>サンドストーン作戦</b>					
Xレイ	1948・4・14	塔上	200㏪	37キロトン	エンジェビ島
ヨーク	4・30	塔上	200㏪	49キロトン	ルニット島
ゼブラ	5・14	塔上	200㏪	18キロトン	アオモン島
<b>グリーンハウス作戦</b>					
ドッグ	1951・4・7	塔上	300㏪	47キロトン	ルニット島
イージー	4・20	塔上	300㏪		エンジェビ島
ジョージ	5・8	塔上	300㏪		エレロン島
アイテム	5・24	塔上	300㏪	エンジェビ島	
<b>アイビイ作戦</b>					
マイク	1952・10・31	地上	10.4メガトン 熱核反応装置	エルグラップ島	
キング	11・15	空中投下	1500㏪ 500キロトン	ルニット島	
<b>キャッスル作戦</b>					
ネクター	1954・5・13	はしけ	(1.6メガトン)	エルグラップ島跡	
<b>レッドウィング作戦</b>					
ラクロッセ	1956・5・4	地上		40キロトン	ルニット島
ユマ	5・27	塔上	200㏪		アオモン島
エリー	5・30	塔上	300㏪		ルニット島
セミノール	6・6	地上			ボーケン島
ブラックフット	6・11	塔上	200㏪		ルニット島
キッカプー	6・13	塔上	300㏪		アオモン島
オサージ	6・16	空中投下			ルニット島
インカ	6・21	塔上	200㏪		ルジョー島
モホーク	7・2	塔上	300㏪		エレロン島
アパッチ	7・8	はしけ			エルグラップ島跡
ヒューロン	7・21	はしけ			エルグラップ島跡
<b>ハードタック第1章作戦</b>					
カクタス	1958・5・5	地上		18キロトン	ルニット島
バターナット	5・11	はしけ		1.37メガトン 水爆	ルニット島
コーア	5・12	地上			テデブッシュ島
ワプー	5・16	水中	500㏪		リベウオン島
ホーリー	5・20	はしけ			ルニット島
イエローウッド	5・26	はしけ			エンジェビ島
マグノリア	5・26	はしけ			ルニット島
トバコ	5・30	はしけ			エンジェビ島
ローズ	6・2	はしけ			ルニット島
アンブレラ	6・8	水中	150㏪		イクレン島
ウォルナット	6・14	はしけ			エンジェビ島
リンデン	6・18	はしけ			ルニット島
エルダー	6・27	はしけ			エンジェビ島
オーク	6・28	はしけ		8.9メガトン 水爆	ポコルオ島
セコイア	7・1	はしけ			ルニット島
ドックウッド	7・5	はしけ			エンジェビ島
スカエボラ	7・14	はしけ			ルニット島
ピソニア	7・17	はしけ			ルニット島
オリブ	7・22	はしけ			エンジェビ島
バイン	7・26	はしけ			エンジェビ島
クウィンス	8・6	地上			ルニット島
フィッグ	8・18	地上			ルニット島

### エニウェトク環礁



# はじめに



映画「ハーフライフ(半減期)」日本語版がやっと完成、各地での上映がはじまりました。この映画は、映画としては初めて、米国の核実験で被ばくしたマーシャル諸島の人々を追ったドキュメンタリーです。

まずは映画を見てほしいのですが、この映画を通じて目を向けてほしいことのひとつは、「日本は唯一の被ばく国」と誤って語られ、そのことで視野に入ることの少なかった太平洋の被ばく者たちの現実を、知ってほしいということ、そしてもうひとつは、人間は放射能と共存できるのかについて、映画を見て考えてほしいということです。

ロングラップの人々は、実験から30年あまりたつて、島を出ざるをえなくなりました。このとき米国は、ロングラップの人たちが受ける被ばくは基準値より低いとして、援助の手をさしのべようともしませんでした。それどころか、ガンなどのさまざまな病気は放射能が原因ではないとして、被ばく責任を認め

ようともしていないのです。

昨年4月26日に起こったチェルノブイリ原発事故は、世界中に死の灰をばらまき、放射能入りの食品は、私たちの食卓にもほってきました。しかも、このせまい島国に34基もの原発が動いている現実を考えると、太平洋の隣国で起こっていることは、他人ごとではありえません。そして日本政府が、原発推進の姿勢を変えようともせず、そこから出る核廃棄物を太平洋に捨てる計画を今なお放棄していないという事実は、日本の私たちもまた、映画で描かれた核をもつ傲慢な人々の側に身をおいているのだと、問いかけています。

マーシャルの人々は、海のかなたから「放射能と人間は共存できない」と警告を発しています。それを私たちはしっかり受けとめたい。そして核も原発もない社会に一步でも近づきたいと思うのです。この映画が、そんなきっかけのひとつになればと思っています。

## ドキュメンタリー映画 半減期 ハーフライフ 日本語版 HALF LIFE

1985年 オーストラリア  
デニス・オロウク(Dennis O'Rourke)監督  
ベルリン映画祭参加作品  
16ミリ(音声マグネット方式) 1時間20分  
日本語版製作:反核パシフィックセンター東京  
貸出料:1回3万円

●フィルム貸し出しの問い合わせ先●

反核パシフィックセンター東京 ☎ 03(815)1648  
〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内

## 全国各地で自主上映を!

太平洋で何が行なわれてきたのか、そして何が進行しているのか、核とは、放射能とは——核時代のまっただなかに生きる私たちへの貴重な<sup>メッセージ</sup>警告ともいえるこの映画を、多くの人に見てほしいと思います。

フィルムを貸し出しますので、各地で自主上映会を計画してください。お求めがあれば、講師の派遣も含めて、フィルムをもっての全国行脚もやりたいと考えています。予約を受けつけますので、どうぞよろしく。

ドキュメンタリー映画

# 半減期 HALF LIFE ハーフライフ

内 容 紹 介

1985年オーストラリア

デニス・オロウク監督 Dennis O'Rourke

この映画は、核時代の幕明けとなった、特殊相対性理論による質量とエネルギーの公式について、アインシュタインが説明しているところからはじまる。この理論は兵器へと応用されることになる(最初の原爆は1945年7月16日、米ニューメキシコ州アラモゴードで炸裂、そして広島、長崎に投下された)。

太平洋戦争の終了とともに、それまでの日本にとってかわって、米国がマーシャル諸島をはじめミクロネシアの島々を、国連信託統治領の名のもとにその支配下においた。信託統治協定には「福祉優先の立場にたち、住民の権利と基本的な自由を保護すること」がうたわれていた。しかし米国は、核兵器開発の実験場としてマーシャル諸島を使用した。

当時の米国政府の記録フィルムや住民へのインタビューなどをとおして、その後、マーシャル諸島で起こった出来事が描かれていく。

※ ※ ※

1946年ビキニ環礁。「人類の利益」のために島を出るよう説得する米軍将校。島を追われるビキニ島民。



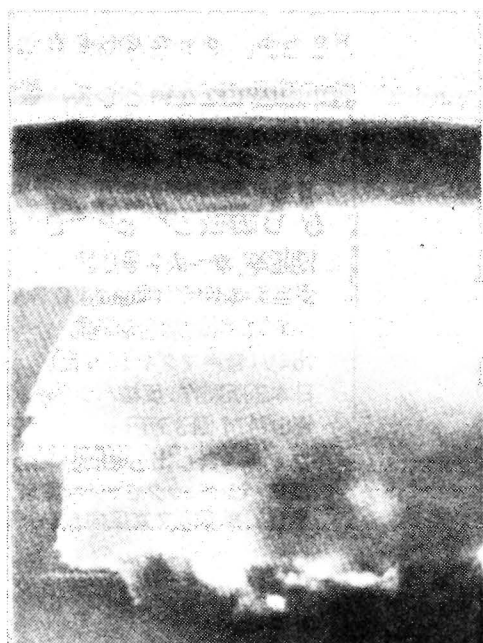
▲人間のかわりにのせられた実験動物たち

1946年7月1日、こうして行なわれたマーシャル諸島での最初の原爆実験(史上4番目の核爆発)。その破壊力を調べるため、人間のかわりに動物をのせた実験船が標的となった。以後マーシャル諸島では、ビキニとエニウェトクの2つの環礁で、10年にわたり66発の核爆弾が炸裂することになった。

1947年の東西分裂、米ソ冷戦のなかで1949年、ソ連も原爆実験に成功。トルーマン大統領は、原爆よりもさらに強大な破壊力をもつ“水爆”の開発を決定する。ふたたびマーシャル諸島の核実験に拍車がかかることになった。(1952年、米国はエニウェトク環礁で水爆実験に成功。1953年、ソ連も水爆実験に成功)

※ ※ ※

なかでも1954年3月1日、ビキニ環礁で行なわれた「ブラボ」水爆実験は、初期の原爆の少なくとも500倍と推定された最大級の水爆実験だった。原子力



委員会の宣伝映画は、「特に今回の実験は太平洋全域に死の灰が降る可能性があるので慎重を期さねばならない」と説明する。しかし、ビキニの東隣りに位置するロンゲラップ環礁の住民は、それ以前にビキニで行なわれた実験のときとは違い、避難させられなかったのである（ビキニでは1946年7月に2回実験が行なわれているが、このときロンゲラップの人々は2カ月間ラエ環礁に避難させられた）。こうして行なわれた「人類史上最大の爆発」。

日本では、この「ブラボー」水爆実験で第五福竜丸などの日本漁船が被ばくしたことが知られている。そのとき同じ死の灰は、逃げ場のないマーシャル諸島の人々のうゑに降りそそいでいた。ロンゲラップをはじめマーシャル諸島の人々には、なんの警告もなかった。当時のことを語るロンゲラップ島民。子供たちは、死の灰とは知らず、絵で見た雪が本当に降ってきたと思ひ、そのなかで遊んだ。そしてその夜、だれもが体の異常を



▲死の灰をあびたロンゲラップの人々

覚えた。

原子力委員会委員長のルイス・ストローツ提督は、「風は予測したよりも南側へ向かい、ロンゲラップ、ロンゲリック、ウトリックが死の灰の通り道に入っ



た」。このため「日本の船員23名、アメリカ兵28名、マーシャルの島民236名（実際には243名）」が死の灰の降下地域にいたと発表。そして「彼ら全員をただちに避難させ」、「島民236名もいたって健康で満足そうに見えた」と語った。

※ ※ ※

しかしマーシャルの人々は（そしてロンゲリックにいたアメリカ兵は）、実は“モルモット”としてとり残され、被ばくさせられたのだった。この恐るべき事実は、マーシャル諸島の住民たちだけでなく、気象官として実験に参加したアメリカ兵などの証言、当時の米国政府の公式文書から明らかにされてゆく。

「すでに風は、東の方向に吹いていたのはまちがいない。ですから、彼らはマーシャルの島民たちをモルモットとして使うつもりだったんでしょう」と語るのは、通信士としてロンゲリック環礁にいたドン・ベーカー。

ロンゲラップ島民は、死の灰のなかで50時間にわたり放置された。「3月1日のあの晩、ジブシー号という米軍の船が、ロンゲラップとロンゲリックのあいだを通っていた。だから、彼らを救出するのはわけなかった」と証言するのは、気象官としてロンゲリックにいたジーン・カーボ。

※ ※ ※



第五福竜丸の帰還は、被ばくの実態を世界に知れわたらせ、国連でも激しい論争を呼ぶことになった。しかし国連のアメリカ代表は、「共産主義の脅威か

◀1954年3月1日「ブラボー」水爆実験





ら自由世界を守る」ために核実験を継続すると発表。アイゼンハワー大統領も、水爆の保有は不可欠と表明する。

1957年、ロンゲラップの村長ジョン・アンジャンをはじめ、

被ばく島民を代表して7人が米国を訪れるが、“鉄の部屋”に入れられ、「医学的に貴重なデータ」として利用される。このときのニュースは、「彼は陽気で従順な野蛮人です」と語っている。

※ ※ ※

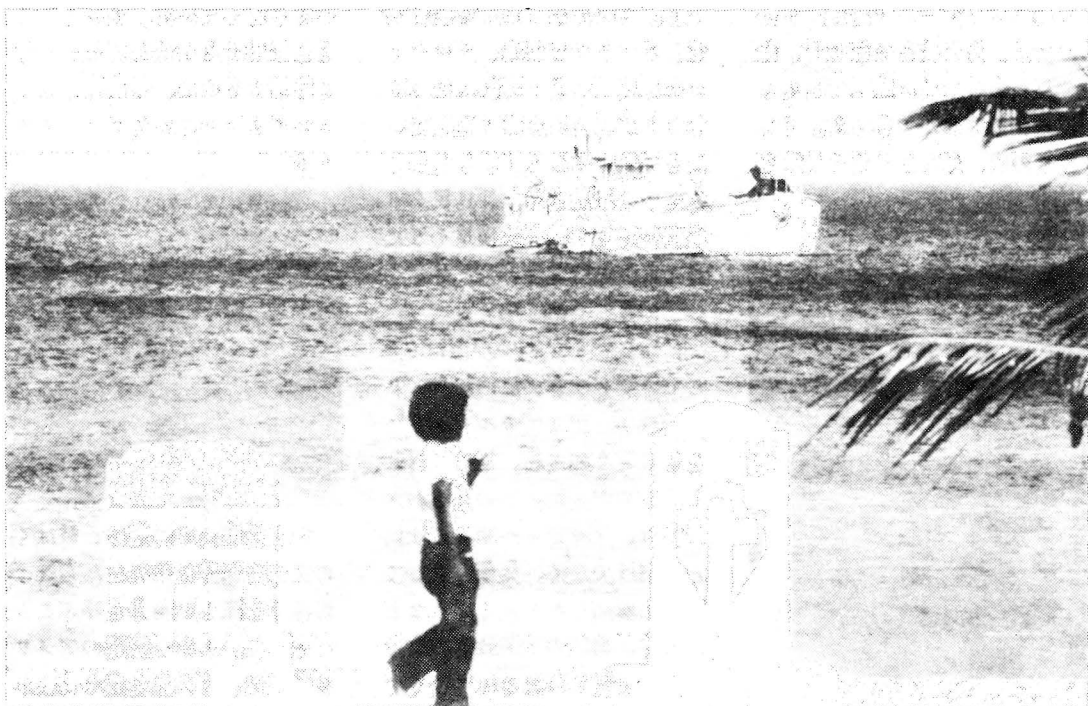
ウトリックの人々は実験から3カ月後に、ロンゲラップの人人は3年3カ月後の1957年6月に島に戻る事が許された。し

かし残留放射能は、島の食物と水を通じて人々の体をむしばみつつけることになった。

ロンゲラップの人々が帰島したときの原子力委員会の発表は次のようなものだった。「島民たちがこの島に住むことにより、放射能が人体におよぼす非常に貴重な生態学的データがえられるであろう」（1957年原子力委員会報告）

※ ※ ※

毎年やってくる原子力委員会（1975年以降はエネルギー省）の調査船。米国政府はくり返し環礁は安全だと語る。しかし実験から30年あまりへた今もなお、マーシャル諸島では甲状腺障害やガン、白血病、障害児の出産など、放射能が原因と思われる病気が絶えることなく続いている。ロンゲラップとウトリックの住民の証言の数々。（「人物紹介」参照）



▲米国から毎年やってくる調査船(Dennis O'Rourke)





▲孫のキモを抱くタニラ・ジョルジュ(Dennis O'Rourke)

▼ミツワ・アンジャイン

米国につれていかれた息子が、  
たらいまわしの検査のあげく、  
「ニワトリでも切り刻むかのよう  
に……実験動物のように扱われ  
るのを見た」と語るのは、ロン  
ゲラップのミツワ・アンジャ  
インさん。彼女は、息子のレコ  
ジを19歳のとき白血病でなくし  
ている。

※ ※ ※

戦後40年あまりにわたる信託  
統治の終了をまえにしてテレビ  
に登場するレーガン大統領。



「アメリカの家族の一員として  
皆さまをむかえ、ともに築きあ  
げてきたのは民主主義と自由と  
民族自決の精神です」とほほえ  
みかける。



ミツワさんは、それにこたえ  
るかのようにこう語っている。  
「アメリカ人は知らないの  
でしょうか？ どの命も大切な  
ものであることを。ちゃんと教  
育を受けている人たちなのに。  
……自分たちを利口だと思っ  
ているんでしょうが、実際は頭  
がおかしいのです。愚かな行  
為に関しては利口ですけどね……」

※ ※ ※

ロンゲラップの人々は1985年  
5月、自ら生まれ故郷の島を  
すて、集団移住するにいたった。  
生き残るためには、放射能から  
逃れるしか道はないというぎり  
ぎりの決断だった。

「ブラボー」水爆実験のフィ  
ルムを見た直後の議員たちが、  
驚くほど素直にそのショックを  
語っている。「人間がどんなにち  
っぽけな存在なのか考えさせられ  
ます」

ドキュメンタリー映画

# 半減期 HALF LIFE ライフ

人物紹介



## アルバート・アインシュタイン

説明することもないほど有名な人物。彼は映画の冒頭で、特殊相対性理論のなかの「質量とエネルギーの変換公式」について述べている。1905年に発表さ

れたこの理論は、1932年、コッククロフトとウォルトンが、世界で初めて原子核の人工破壊の実験に成功したことで実証された。それはまた、核時代の幕明けを意味するものであった。

(1878-1955年)



## ミツワ・アンジャイン

ビキニの東約180キロのロンゲラップ環礁で被ばく。その日のようす、そしてその後、人間として生まれてくることのなかった子供のことを語る彼女は、レコジのお母さんでもある。息子レコジがモルモットのように扱われ、殺されていった悲しみを語る彼女の言葉は、まさにこの映画の伝えようとしていることそのものである。



## ジョン・アンジャイン

レコジの父親。当時ロンゲラップの村長であった彼は、他の島民とともにシカゴへとつれていかれ、「鉄の部屋」へ入れられる。アルバムを見ながら、息子レコジのことを語る年老いた彼の姿を見るとき、核の時代のまっただなかを生きてきた彼の人生が見えてくる。



## レコジ・アンジャイン

映画のなかには、ありし日の彼の写真とお墓しか出てこないが、彼は1972年11月19日に急性骨髄性白血病でなくなった。米国は、彼については核実験が原因で病気になったことを認め、「人類の水爆死第1号」と呼んだ。

死の灰をかぶったロンゲラップ島民64人のうち、すでに26人がなくなっているが、米国が被ばくと因果関係を認めただのはレコジと、1974年に胃ガンでなくなったナブタリ・オエミ老人の2人だけである。



## ティマとミュージーゼ夫妻

漁に出ていて死の灰をあび、その日に食べ物がおかしな味をしたと語る2人は、ロンゲラップ環礁で、被ばくした。当時ロンゲラップには64人の島民がおり、そのうち4人が身ごもっていた。そして、18人が近くのアイリングナエ環礁へ漁にでかけていた。彼らは、実験後50時間あまりたってから救出され、クワジュリン環礁へとつれていかれた。



## ウイントン・シェル

娘の障害も、自分のガンも核実験が原因にちがいないという彼は、ビキニの東約480キロのウトリック環礁で被ばくした。ウトリックには当時157人の島民がおり、霧のように降ってきた死の灰をあびている。彼らは

実験後70時間以上たってから救出され、やはりクワジュリンへとつれていかれた。そしてその3カ月後には、再びウトリック島へともどされている。彼の娘が生まれたのは実験から20年あまりたった1975年7月のことだった。



(Gary Kildea)

## エレン・ボアス

ロンゲラップの女性。「こんな実験をしたアメリカ人を憎みます」と語る彼女は、多くの人人と同様に、核実験が原因と思われる甲状腺障害で手術を受けている。



## タニラ・ジョルジュ

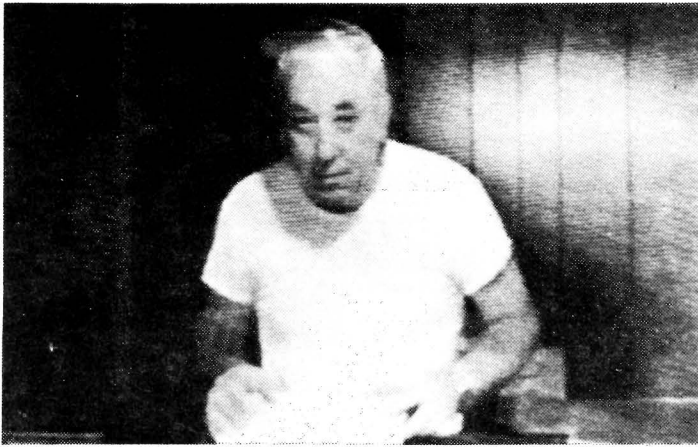
ロンゲラップの女性。孫のキモを抱きながら「たくさんの子供たちがこの子のように、障害をもって生まれました。……目がギョロギョロして定まらず、自分の体も思うように動かさない」と話す。キモの両親は、実験当時はまだ子供だった。そして「これは絶対にあの爆弾のせいです。……爆弾の前には、こんな病気はなかったのですから」とも……。



## カールとミーゼ夫妻

残留放射能は、島に住む人々の体を今もむしばんでいる。一家で4人が甲状腺の手術を受けたと話す彼女は、ウトリック環礁の住民。爆弾のあとで生まれた2人の息子までもが甲状腺手術を受けた。それは汚染された食べ物が原因だと語る。





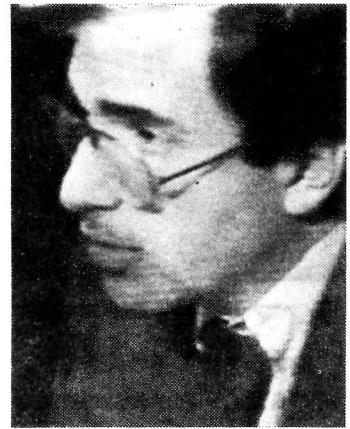
## ジーン・カーボ

気象官として、ビキニの東約220キロのロンゲリック環礁で観測にあたっていて、被ばく。カードを見せながら、自分は生粋のアメリカ人だと語る彼も、米国政府によって被ばくさせられた側の人である。そして彼も、被ばくすることを知っていて、実験を行なったと断言している。

ロンゲリックには当時28人の

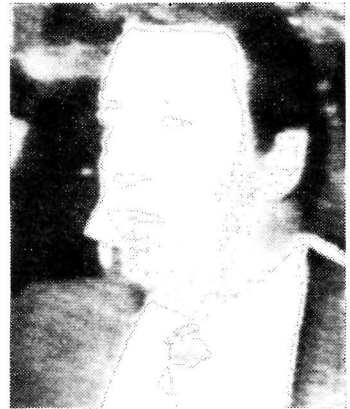
米軍人がいた。実験直後から死の灰の降下が始まり、気象官たちは、救助の要請を司令部に行なうが、放置され、ようやく34時間後に救出されている。

彼が映画のなかで触れている米戦艦ジブシー号は、ロンゲラップのすぐ近くにおいて、その日のうちに島民を救出することもできた。しかし米国はそうはしなかった。



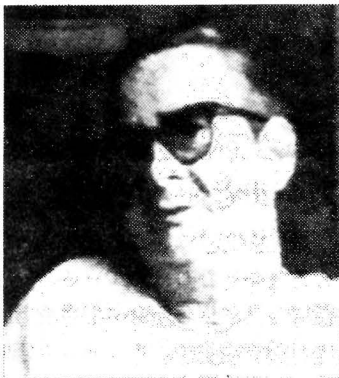
## ジョナサン・ウイスガル

ビキニ島民の顧問弁護士。エネルギー省の文書をもとに、死の灰が人々の住む島に降るのを承知のうえで実験を行なった、と米国政府の責任を追及。



## リチャード・ゲリー

ロンゲラップ島民の顧問弁護士。ロンゲラップがビキニと同じぐらいひどく汚染されていることを追及。



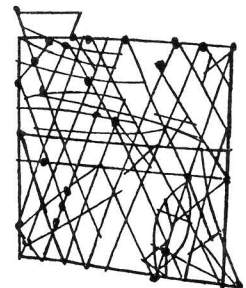
## ドン・ベイカー

彼は通信士として、ロンゲリックにいた。彼は、ルイス・ストローツ提督がいうように風向きが突然変わったのではなく、最初から風は人々の住む島へ向かっていたと証言している。



## ラモント・ノーレイ

彼も気象官として、カーボとともにロンゲリック環礁にいた。彼もやはり、島民がモルモットとして使われたと証言している。



## デニス・オロウク 監督紹介



デニス・オロウクが映像の世界に入ったきっかけは、1970年に仕事を探してシドニーへ出てきたときにはじまる。ABCテレビの庭師の助手として働きだし、その後、カメラマンの助手となる。1973年この仕事をやめ、フリーのカメラマンとなり、パプアニューギニアへ。彼はそこで70年代のほとんどをすごし、パプアニューギニアの言葉を習い、そして今つれあいであり協力者であるロサンナと一緒にいる。オロウクはここで、パプアニューギニア独立の過程を追ったドキュメンタリー「Yumi Yet」(1976)と「Ileksen」(1978)の2本の映画をとっている。しかし、同時にまた彼は、民族学を専門とする映画人であるというレッテルをはられることになってしまう。

その後、ヤップ島へテレビがもちこまれること

によって、島の生活がアメリカ文化に汚染されてゆく過程をとった「Yap...How Did They Know We'd Like TV?」(1980)を、また、Sharkcallingという島にある昔からの儀式を扱った映画「The Sharkcallers of Kontu」(1982)、そしてオーストラリアのかれの出身地クイーンズランドの北部にすむ先住民アボリジニの人たちの土地権を扱った「... Couldn't Be Fairer」(1984)をとる。

これらの作品のいくつかは、イギリスBBC放送などでもオンエアされる。

「HALF LIFE」をとるきっかけとなったのは、1983年にフィルム・オーストラリアの仕事でマーシャル諸島を訪れたときに、飛行機の故障でロングラップに2週間足止めされ、このときに、「ポケーとしていてもしかたがないから、とにかく映画をつくらう」ということになり、ミツワ・アンジャインさんにインタビューしたのはじまる。当初、1時間程度の短篇として考えていたのが、米国の記録フィルムなどを加えることにより現在のかたちになった。

彼は現在、リゾート地と化しつつある太平洋の現状を扱った映画を準備中とのこと。



## 日本語版製作まで

私たちがこの映画を知ったのは昨年夏、マーシャル諸島から来日したチェトン・アンジャインさんがビデオをたずさえていて、それを見ることができたからでした。

これまでも、マーシャル諸島の被ばく者たちのことは本誌でも何度かとりあげ、また、ロングラップの人々から話を聞きセッションを受け、「第5福竜丸のむこう側」というスライドにまとめたことがあったのですが、この映画を見て、これまでこと

ばでしか知ることができなかったことが、動く映像によって実によく描かれているのを見て、衝撃でした。それ以来、日本でも上映したいと考えつづけてきました。

それが具体化しはじめたのは今年に入ってからで、製作者のオロウク監督のご好意で、ほとんど実費のかたちでフィルムを1本購入することができ、3月1日に行なった反核独立太平洋の日(ビキニ・デー)の集会では、同時通訳のようなかたちで

上映することができました。

そのときの反響も大きく、どこでも上映できるようにと、日本語版の製作にとりかかりました。翻訳に手を入れ、データを調べなおすところからはじめて、初体験の映画製作にもかかわらずさまざまな人の協力をえることができ、5月末に完成にこぎつけることができました。資金も、借金とともに、さまざまなかたから送っていただいたカンパでなんとかやりくりすることができました。今後は上映運動のなかで製作費を回収し、借金返済にあててゆきたいと考えています。

# 現代をうつしだす鏡

ポール・バイネーズ

豪『シドニー・モーニング・ヘラルド』1986年2月13日

第二次世界大戦後すぐに、マーシャル諸島は米国の保護下に置かれた。その1年後、保護というには奇妙なことだが、米国はそこで核実験を開始した。

デニス・オロウクの新作フィルム「ハーフライフ」は、米国が行なったその非人間的な行為の結果を人間的な視点から描いたものである。しかしこの作品は、単に核兵器の恐怖、人種主義がもたらす恐ろしい結果を描いているだけでなく、現代をうつしだす鏡として、もっと普遍的な広がりをもった、感動的な驚くべきフィルムである。

オロウクは、疑いなくオーストラリアが生んだ最も優れたドキュメンタリー映画作家のひとりだが、彼にはこの映画をつくった直接の目的が2つある。ひとつは、50年代半ばに行なわれた水爆実験が島民たちにいかなる被害をもたらしたかを記録することであり、もうひとつは、マーシャル諸島の人々がこれまで信じてきたように、米国が意図的に彼らを汚染にさらしたのだという点をはっきりさせることである。

たとえこの映画を見るものが、後者の点についてオロウクが示した証拠を受け入れないにして

も（入念で説得力のある証拠である）、前者、つまり被害のすさまじさは消えるわけではない。

故意にであろうとなかろうと、1954年3月1日のビキニ環礁での水爆実験は——「ブラボー」というコード名で呼ばれる——当時ロンゲラップとウトリックに住んでいた243人の人々と、生まれくる彼らの子供たちの生命を、現実に破壊してしまったのだ。

島民を死の灰が降り続けるなかに50時間も置きざりにしておいてから、やっと米海軍の船が島民を避難させたのだ。それ以前のずっと規模の小さい実験でも、前もって避難が行なわれていたのに、である。

ビキニから約180キロ東にあるロンゲラップ島の人々に向けられたオロウクのカメらは、彼らのあいだにゆっくりと広がる被害の炎を追い、実験が何をもたらしたのかを私たちに示す。それは、コメントを一切つけずに示されるだけに、よけいに強く私たちに訴える。

あるシーンでは、ひとりの女性が、「内臓のかたまりのような」胎児を死産したときの恐怖を静かに語り、のどにある甲状腺ガンの手術の傷あとをみせる。

そのうしろを、ひとりの少女が、障害を起こした片足を引きずりながら、松葉杖をついて歩く…。

オロウクは、イロニー（皮肉）を表現の主な武器のひとつとしてもちいている。サウンド・トラックで流れる、陽気だけだるいハワイアン・ギターの調べは、カメラがうつしだす映像を補完する。スクリーンには、牧歌的な島々、風にそよぐヤシの樹、静かな波打ちぎわで遊ぶ子供たち——「南の楽園太平洋」という常套句で思いうかべる風景が続く。しかし、その土も、水も、食物も汚染されていることを、私たちは知っているのだ。

「ハーフライフ」は、ブラボー実験から30年たったときにつくられた。このタイトルは、実験が降らせた最も危険な死の灰のあるもの（セシウムとストロンチウム）の半減期（ハーフライフ）が30年であること、そして、1954年以来“半分に縮められた”とでもいうべき島民の命をさしているともとれる。

その意味では、「ハーフライフ」は大量虐殺、つまり力のまさら文化が他の文化を徐々に絶滅させることを扱ったものであり、オロウクのこれまでの作品「Sharkcallers of Kon-



▲被ばく当時ロンゲラップの村長をしていたジョン・アンジャイン(左)とデニス・オロウク監督(右) (Martin Cohen)

tu]、[Yap] および「……Co-  
uld'n't Be Fairer」と同系  
列におくことができる。

しかしオロウクは、「ハー  
フライフ」でかつて見られなかつた  
鋭さと簡潔さを達成したように  
思われる。というのも、この  
フィルムには、明確な方向感覚  
と目的意識があるからだ。押し  
つけがましい議論を避けること  
で、映像の衝撃力を高めている。  
見るものは、作者の結論が先に  
あって証拠はあとから撮ったの  
だ、という印象をもつことは決  
してないだろう。ひとつの探求  
としてこの映画がつけられている  
からである。

この映画にはナレーションは  
つかないし、字幕もどうしても  
必要なときに説明文が少しだけ  
出てくるだけで、物語はもっぱ  
ら映像を通してなされる。実験  
の直接の被害者の姿と声を主と  
して、あいだに米国の公文書・  
記録を精力的に調べあげて発掘  
したフィルムをはさみこみなが

ら進行する。

こうした映画の技術のおかげ  
で、観客は自分の見ているもの  
に自ら参加し、判断を下すこと  
ができるのである。

ブラボー実験による島民被ば  
くが意図的にもたらされたもの  
であるということの最も有力な  
証拠は、ロンゲリックで気象官、  
通信士の任にあっていた米国の  
元兵士たちとのインタビュー  
で示されている。

米国当局は実験の数日後、「28  
人のアメリカ兵と236人のマー  
シャル島民」が不慮の被ばくを受  
けた、と発表した。実験の直後  
に風向きが変わり、死の灰が、  
北もしくは西に向かわず東側、  
つまりロンゲラップ、ロンゲリ  
ック、ウトリックに降りそそい  
だからだ、と説明した。

しかし、気象官たちは——障  
害をもった子供がいたり、ガン  
を患っているものもいる——そ  
れは嘘だ、と語っている。風は、  
実験の前も、最中も、あとも、

島民たちの方に吹いていたのだ、  
と証言している。

どちらが嘘をついているのか？  
このフィルムは、被ばくが偶然  
ではなかったということ、米軍  
当局が放射線被ばくの影響を長  
期にわたって調べるためのデー  
タを必要としてことを裏づける  
状況証拠を数多く含んでいる。

もし仮に、故意に行なったと  
いう言い分に対して、わずかな  
りとも疑いをさしはさめるとす  
れば、それは、この映画に当時  
の政策決定者とのインタビュー  
がひとつも出てこないことのため  
だろう。政策決定者たちはもち  
ろん、故意に行なったという  
申したてを、確信をこめて否認  
したはずである。しかしこれは、  
オロウクの落ちどではない。彼  
らの多くは死んでしまったし、  
オロウクが協力を求めても拒否  
したにちがいないからである。



# もうひとつの主演 放射能

この映画は、「半減期」というタイトルが示しているように、目には見えないもうひとつの主演——放射能を描いたものです。

放射能というのは、放射線を出す能力やそういった能力をもつ物質（放射性物質）の意味で、放射能の怖さは、その物質から出る放射線（アルファ線、ベータ線など）が人体をさまざまな意味で傷つけるからです。

ロンゲラップの人々は、「ブラボー」水爆の死の灰(放射能)によって ①ガンマ線の全身照射 ②身体に付着した死の灰によるベータ線の全身照射 ③呼吸と水や食物の摂取による内部被ばく——の3つの影響を受け

ました。

人間が放射線をあびると受ける影響のひとつが急性障害です。ロンゲラップの人たちは、被ばく直後から吐き気、めまい、脱力感、下痢、頭痛などを訴え、皮膚炎（やけど）や脱毛などが起こりましたが、これらが急性障害といわれるものです。

これに対し、数カ月から数年後、ときには数10年たってあらわれるのが晩発性障害で、ガン、白血病、生殖能力の減退、早く年をとってしまう「加齢現象」、そして遺伝的影響などです。

晩発性障害の怖さは、被ばくしたときに自覚症状がなくても何10年かたって突然あらわれる

こと、しかもこれ以下なら影響が出ないという安全値がなく、どんなに低い放射線であっても、低いなりに影響が出てくることです。

ロンゲラップの人たちは、帰島後も残留放射能で汚染された島で、食物や水、空気などをおして放射能を体内にとりこむことになりました。身体に入った放射能は、体内で放射線をあびせつづけることになります。しかも、人工的につくりだされた放射能は、ヨウ素は甲状腺や卵巣に、ストロンチウムは骨に、セシウムは筋肉や卵巣にと、人体の一部に蓄積し、周辺の細胞をおかしつづけることになりま



## 放射能は人体のどこに蓄積するのか





す。

しかも放射能というのは寿命が長く、ストロンチウム90やセシウム137だと半減期は約30年、つまり半分に減るのに30年かかり、60年たっても4分の1にしかならないのです。

ロンゲラップでは被ばく9年後の1963年ごろから甲状腺障害が一気に広がり、さまざまな晩発性障害が多発しました。若い女性のあいだでは、流産・死産があたりまえのここのようになり、死者も年をおうにつれ増えました(87年6月現在で3・1当時島にいた86人中26人が死亡、甲状腺切除は約40人におよぶ)。

一方、被ばく当時は自覚症状(急性障害)をほとんど訴えていなかったウトリックの人々のあいだでも、20年後の1975年をさかいにロンゲラップと同じような障害が、同じような勢いであらわれはじめたのです。

しかも映画のなかで描かれているように、近年になって、生

まれつき肺や心臓などに欠陥をもった子供や寝たきりの子供など、遺伝的影響と思われる障害児の出産が、急激に増加しています。

さらに問題なのは、ビキニから550キロも離れたウォッジェ環礁など、これまで被ばく者はいないとされ、追跡調査さえされなかった島々からも、放射能による病気を訴える人が出てきていることです。

日本では、「原子力発電所の労働者は年間5000ミリレムまで、周辺住民は500ミリレムまではよし」とする「許容基準」が決められています。

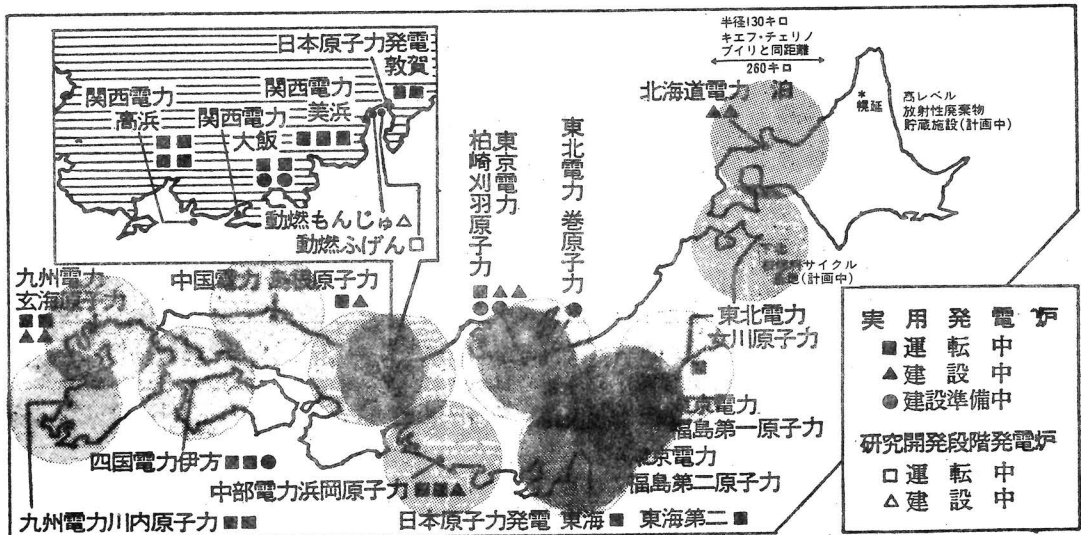
しかし、マーシャルの人々が身をもって訴えているのは「放射線に安全値はない」「放射能と人間はけっして共存できない」ということなのではないでしょうか。



▼キモは生まれつき体が悪く、寝たきりである



### 日本列島にひしめく原子力発電所(1987年7月現在34基)



# 放射能でおおわれた島 を取材して

豊崎 博光 (フォト・ジャーナリスト)

写真集『グッドバイ ロングラップ』より

◎「放射能の被害から逃れるために、ロングラップ島の人びとが故郷の島を離れます」。  
1985年1月3日、ジョン・アンジャインさんから届いた手紙を見たとき、私の正月気分はふきとんだ。1978年4月以来、5回、延べ180日間にわたってマーシャル諸島の被曝者の取材をしていたが、ロングラップ島民の被曝が故郷の島を離れなければならないほど深刻だったとは気がつかなかった。ジョンさんと2回手紙をかわした後の2月11日、私は6回目のマーシャル諸島取材に旅立った。

◎マジュロ島やクエゼリン環礁のイバイ島に住む被曝者を取材したのち、4月4日、私はロングラップ島に入り、島民たちが故郷の島を出るまでの47日間を診療所の1室に寝泊りしながらともに過ごさせてもらった。食事は学校の先生であるエモンさん夫妻にお世話になった。滞在中、心に残ったのは、3週間目に女性たちが歓迎会を開いてくれたときのことだった。女性たち1人1人が、アメリカの援助食料のコメとサケの罐詰などをもってきてくれたのである。島民の食料が底をつきはじめて

いることを知っていた私は、胸に熱いものがこみあげ、「コンモル・タタ(マーシャル語で「ありがとう」)」を繰り返すばかりだった。

◎5月20日、ロングラップ島民たちはなにもいわず、故郷の島をふりかえろうともしないで島を離れ、移住船「虹の戦士」号にのりこんだ。移住地メジャト島までの12時間の船旅のあいだも島民たちはなにもいわなかった。私には島民の沈黙は放射能と放射能をつくりだした者への怒りに思えた。

◎1978年8月、私はやはり放射能によって故郷の島を離れるビキニ島民を取材した。このときもビキニ島民たちは寡黙だった。目に見えない、体を感じない放射能におわれる島民を2回にわたって取材した私は、放射能を生んだ人間の業に怒りを感じた。

◎ロングラップ島民の移住が終わった2カ月後の7月、ニュージーランドのオークランド港に停泊中の「虹の戦士」号がフランス情報機関によって爆破、沈没させられて、カメラマンのフェルナンド・ペレイラ氏が死亡した。

◎「グリーンピース」は8月に、1966年以来仏領ポリネシアのモルロア環礁で行なわれているフランスの核実験を「虹の戦士」号を派遣して阻止する計画を立てていた。ロングラップ島民の移住をともに取材した者として、また非核太平洋を願う者として、ペレイラ氏に心から哀悼の意を表したい。

◎私は1978年のマーシャル諸島での取材を端緒に、アメリカ、オーストラリアの被曝者の取材を始めた。アメリカでは、先住民インディアンがウラン採掘によって肺ガンとなった。母なる

ロングラップの人々は、  
おし黙ったまま故郷  
の島を離れた  
(豊崎博光)



ずさわった技術者が50万人、核実験に参加した兵士が25万人、ネバダ核実験場の風下で被曝した市民が12万人いるとされている。オーストラリアでは、イギリスの核実験によって8000人の元オーストラリア兵と多数のアボジニの被害者がいることが確認されている。ソ連、中国、フランスの核被害者の数は不明だが、膨大な数にのぼると思われる。

◎1986年4月26日にソ連のチェルノブイリ原子力発電所で起こった爆発事故を知ったのは、マーシャル諸島でだった。そのことをあるロンゲラップ島民に知らせたとき、彼は

「十数年後、放射線をあびた人は私たちと同じように甲状腺異常になるね」

といて暗い表情になった。

◎人類は放射能のまっただなかにいるといっても過言ではない。にもかかわらず人びとは放射能の恐ろしさを知らず、知ろうともしない。海のかなたから、ロンゲラップ島民が波動にのせて伝えつづけている放射能への警告のメッセージはまだ生かされていない。

——写真集『グッドバイロンゲラップ』（築地書館）の「エピソード」より

大地に抱かれて暮らすインディアンは、生活のために大地を掘り体をむしばまれた。ほかのアメリカ人もまた放射能の危険を知らされずに核開発・核実験にたずさわって被害をうけた。いまアメリカには、ウラン採掘の被害をうけたインディアンは1万5000人、核開発と核実験にた



# “被ばく難民”となった ロンゲラップ島民

## 放射能を逃れて集団移住

この映画の撮影がすみ、完成を目前にした1985年の5月末、ロンゲラップの人々は自分たちの島を捨て、ロンゲラップより南方のクワジュリン環礁にある無人島メジャトへ集団移住しました。

映画に出てくるとおり、放射能による被害は、実験から30年あまりへた今もお絶えず、残留放射能が人々の身体をむしばみつつけています。特に子供たちの世代にまで病気が広がるにおよんで、ロンゲラップの人々は集団脱出を決意したのです。

当時ロンゲラップの住民代表が私たちに送ってくれた手紙に

はこうありました。

「私たちロンゲラップ環礁の住民約300人は、私たちの幸福と健康に深刻な影響をもたらしつつけてきた、まことに有害なる放射能に、もうこれ以上むしばまれてはならないと思い、生まれ故郷を離れ、避難しました。クワジュリン環礁の小さな島にのがれることなど、けっして私たちがやりたくてやったことではありません。しかし、これも子供たちと、そしてこれから生まれてくる世代の未来を深く気づかえばこそなのです」

1985年5月20日から28日にかけて、ロンゲラップの全住民325

人がメジャト島へ移住しました。メジャト島は面積が0.4平方キロ、故郷のロンゲラップ島の10分の1の広さにも満たない小さな島です。広い環礁も一部を除いてはいつも波が高いため魚がとりにくく、また食料となるヤシの実やパンの実もわずか、唯一の利点は、マーシャル諸島の島では珍しく塩分を含まない地下水が出るくらいといえます。メジャト島は無人島だったため、テントをはり、井戸を掘り、炊事場を設けるなど、まったく何もない状態から始めた移住生活でした。

※ ※ ※

移住後1年近かった1986年4月に住民から送られてきた手紙は、こう伝えています。

「この島には、ココナツやタコノキ、パンノキの実など、食料となる木が自生していないため、人々は、米国農務省が現地調査船に乗せて配給する食料に大幅に頼らざるをえなくなっています。ココナツ、タコノキ、パンノキなどを植えましたが、実がなるまでに5～6年はいかかります。カボチャを育てている人もいますが、この先1～2カ月で大きな畑をつくって、サツ

▼移住地での生活をはじめたロンゲラップの人々(豊崎博光)



移住地は無人島だったため、▶  
ビニール張りのテントで生活を  
はじめた(豊崎博光)

マイモ、トウモロコシ、インゲン豆、パパイアをつくるつもりです。これらの作物は生長が早いので、近く新鮮な食物を手にすることができそうです」

米国は核実験による被ばく責任を認めていないため、ロンゲラップの人たちの移住に際しても一切の援助を行っていません。現在の食料援助も、他の地域も含めて食料のないところに配られている農務省の援助物資で、それすら定期的にとどかないため、慢性的な食料不足に苦しんでいると伝えられています。

ロンゲラップの人々はくり返し米国に援助を求め、また賠償を要求していますが、米国はこれを無視、それどころか「自由連合協定」なるもののなかで、一定額の補償金を支払うことで今後は核被害の責任を一切問われず、マーシャル住民が起こしている数々の賠償要求裁判を拒否できるようにする——との動きをみせています。



## ロンゲラップ住民に支援を! —

移住したロンゲラップ島民からの訴えにこたえて、募金を集めています。募金は、振替用紙通信欄に「ロンゲラップ住民への募金」と明記のうえ郵便振替口座：東京3-168332(反核パンフィックセンター東京)へ。まとまったところで順次現地の「ロンゲラップ再定住基金」へ送ります。直接マーシャルへ送られる方は下記へ。

Rongelap Resettlement Fund ロンゲラップ再定住基金  
銀行：Bank of Guam, Ebeye Branch  
No. 0108 - 00192  
住所：c/o Julian Riklon  
P.O. Box 5573,  
Ebeye, Kwajalein  
MARSHALL ISLANDS 96970

核実験終了後もつづくミサイル実験・SDI

# 核兵器開発の踏み台とされる マーシャル諸島

マーシャル諸島での核実験は、1958年を最後に行なわれなくなりました。しかしマーシャル諸島では、今なおミサイル開発の実験がつづけられており、マーシャル諸島は米国の核兵器開発の踏み台にされつづけられようとしています。

1959年、世界で一番大きな環礁といわれているクワジェリン環礁は、迎撃ミサイル（敵のミサイルを打ち落とすためのミサ

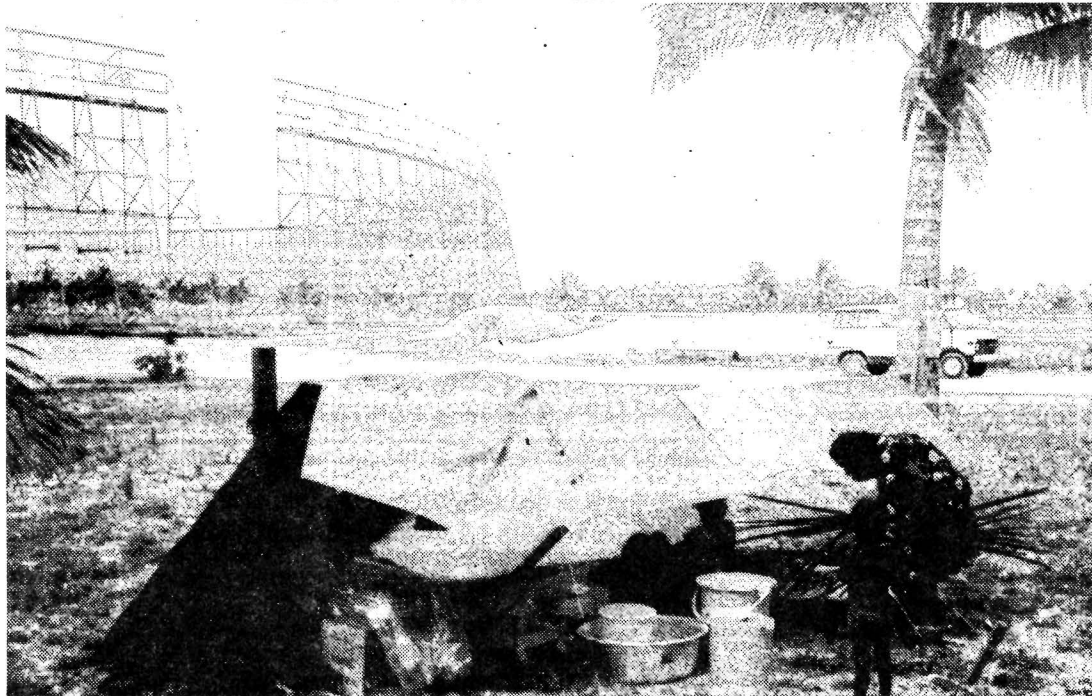
イル）開発のための実験場とされ、環礁中央の礁湖は、その標的となる大陸間弾道ミサイル（ICBM）を米国のバンデンバーグ基地から打ちこむ標的の水面とされました。

それ以来、迎撃ミサイルのナイキーゼウスをはじめとして、大陸間弾道ミサイルのポラリス、ミニットマン、トライデント、そして最新型のMXミサイルにいたるまで、米国のミサイルの

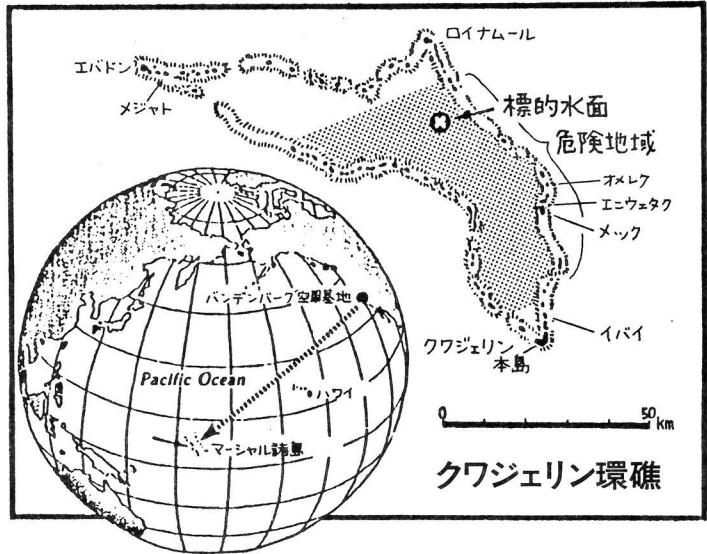
ほとんどが、ここを実験場とすることで開発されてきました。

このため、クワジェリン環礁に住んでいた人々は、自分たちの島をおいたてられ、同じ環礁にある小さな島イバイへと強制移住させられたのです。今では、同環礁で最大のクワジェリン本島をはじめ、環礁のほとんどの島が、自分たちの土地でありながら、米軍の許可をえなければ立ち入ることさえできなくなっ

▼立入禁止となった故郷にもどり、抗議するクワジェリン環礁住民(Marsall Is. Journal 82.6.25)



クワジェリン環礁の4分の3が▶  
危険地域とされ、本来の島民  
の立ち入りは禁止されている



ています。

彼らが住むイバイ島は、20分もあれば一周できる小さな島で、そこに8000人もが押しこまれています。そのため生活環境は悪く、「太平洋のスラム」と呼ばれるほどです。

1982年6月、これに抗議して、クワジェリン環礁の元住民は、「オペレーション・ホームカミング」という、自分たちの本来

の故郷へもどり、住みこむという行動を行ないました。この行動は、断続的ではあるが、続けられています。

しかし米国は、こうした住民の抗議を無視し、ミサイル実験をつづけており、特にレーガン

大統領がおしすすめるSDI（いわゆるスターウォーズ計画）の最重要拠点として、基地施設の拡充がはかられているのが現状です。



## もっと知りたい人のための—— 図 書 案 内

映画「ハーフライフ」で描かれたマーシャル諸島の出来事について、もっと知りたいと思う人にまず紹介したいのは、次の2冊だ。

『棄民の群島』前田哲男、時事通信社、1974、1400円——じっくり腰をすえた取材のなかから描かれたマーシャル被爆民の年代記。被爆民の記録であるとともに、太平洋の植民地支配、核時代の到来、核戦略の変遷……と、大きな歴史のなかで描かれていて、衝撃的。

写真集『グッドバイロンゲラップ』豊崎博光、築地書館、1986、1500円——島を離れるまでのロンゲラップ住民の写真記録。数々の写真（57枚）と簡潔な文章が、放射能におおわれた島からの警告のメッセージを伝える。英文つき。

このほか、マーシャル諸島の被ばく者が描かれているものとして、

『核よ驕るなかれ』豊崎博光、講談社、1982、

1200円 写真集『ビキニ』島田興生、JPU出版、1977、1000円 『ミクロネシア』斉藤達雄、すずさわ書店、1975、980円——などがある。

また、現在も太平洋でつづけられているもうひとつの核実験、フランスによるモルロア環礁での核実験とポリネシア民衆の民族自決・独立へのたたかいを描いたものとして『モルロア』ダニエルソン夫妻、淵脇耕一訳、アンヴィエル、1980、1800円——がある。

月報『反核太平洋パシフィカ』（旧『公害を逃すな！』）でもマーシャル諸島の核実験についてたびたび掲載している。まとまっているものとして紹介したいのが、〔全記録〕核のない太平洋をつくりだそう3・1東京集会（1986年10月号、600円）。豊崎博光さんによる、ロンゲラップ住民の離島をめぐるスライド報告のほか、なぜ反核太平洋なのかを総括的に描いたもの。

ドキュメンタリー映画

# 半減期 HALF LIFE

## 日本語版台本

1985年オーストラリア デニス・オロウク監督作品  
日本語版製作：反核パシフィックセンター東京

凡例 ( ) 映画の場面説明

[ ] 訳者が新たにつけ加えた解説

S1字幕

DENNIS O'ROURKE AND ASSOCIATES FILMMAKERS

S2スーパー

アルバート・アインシュタイン (1878年 — 1955年)

アインシュタイン

「特殊相対性理論によれば、質量とエネルギーは、同一のものがまったく違った形であらわれたものだといえます。

このあまりなじみのない概念は、次の公式によってあらわすことができます。エネルギーEは、質量mに光の速度cの2乗をかけたものに等しい。

つまり、小さな質量のものが、非常に大きなエネルギーをもちうることを意味しています。

これは1932年に、コッククロフトとウォルトンにより実験で証明されています」

S3字幕

HALF LIFE (ハーフライフ)

核時代のひとつの寓話



S4

(フラダンスを踊る少女たち)

スーパー

第1部 原因

S5字幕 (ローリング)

ハワイの南西約3200キロに、サンゴ礁の島々からなるマーシャル諸島がある。太平洋戦争が終わると、国連は1947年、それまで日本が支配していたマーシャル諸島を、国連信託統治領としてアメリカの保護下においた。

信託統治協定は、アメリカに対し次のことを要求している。

“福祉優先の立場にたち、住民の権利と基本的な自由を保護すること”

ところがアメリカは、マーシャル諸島を新たな核兵器開発の実験場として使



	用した。
S6	(鳥を抱く少女、海岸に集まり米軍の上陸用舟艇に収容される人々)
S7字幕 (ローリング)	<p>最初の実験は、ビキニ環礁で行なわれた。ビキニおよび風下にあたる島の人々は、離島を命じられた。</p> <p>その後10年のあいだ、アメリカはマーシャル諸島で、公表されただけでも66発の核爆弾を炸裂させた。こうして島々は、その後何世紀にもわたり、放射能に汚染されつづけることになった。</p> <p>現在アメリカは、信託統治協定の終結を急いでいる。</p> <p>アメリカ政府と議会では島民への補償金額をめぐり、審議が続けられている。</p>
S8スーパー	ビキニ島民の顧問弁護士、ジョナサン・ウィスガル
ウィスガル弁護士	<p>「議長。あなたは、あらかじめビデオをごらんになっていると思いますが、ここにおられる方々の参考のため、ビキニの歴史と現状について、5分ほどにまとめたビデオを上映したいのです。</p> <p>テープをスタートしてよろしいでしょうか」</p>
議長	「電気を消してくれますか」
ウィスガル弁護士	「百聞は一見にしかずです」
S9フィルム・リポーター	<p>きたる 7月 1日には、このビキニ環礁はあとかたもなくなってしまうかもしれません。それにもかかわらず、島民たちはもちまえの純朴さと明るさ、そして人あたりのよさで私たちを歓迎し、進んで協力さえしてくれます。</p> <p>とはいえ、島民たちが核エネルギーについて、我々ほどの知識があるわけもなく、この実験が何を意味するのかも、とうてい理解しえないでしょう。</p>
S10	(浜に集まった島民を前に軍人が話す様子を撮影している)
スーパー	1946年 ビキニ環礁
軍人 [ワイアット 海軍准将]	<p>「ジェームス、みんなにアメリカ政府は、この巨大な破壊力を人類の利益に役立てようとしているのだと伝えてくれるかね」</p> <p>(マーシャル語通訳)</p>
軍人	「もう、避難計画については知っているはずだが、“ジュダ大王”に、皆がこの計画に従ってくれるか、聞いてもらってくれるかね」

(マーシャル語通訳)

通訳ジェームス

「はい、私たちは、ここから立ち退くことに同意します。すべては神のおぼしめしです」

軍人

「それはよかった。すべては神のおぼしめしなのだから、すべてうまくゆくと言ってくれ」

S11フィルム・リポーター

、このように、アメリカ政府はビキニ島民と避難計画について話しあいました。もともと太平洋の人々は、島々を渡り歩いてきた民なのです。そして、これからヤンキーが島の暮らしにちょっとした彩りを添えてくれるのではないかと、楽しみにしているのです。

S12フィルム・リポーター

73隻の実験船がビキニ環礁に錨をおろしました。これは科学者たちが原爆の破壊力とその影響に関する科学的データを集めるために用意された実験船のもようです。さまざまな動物たちが人間のかわりに乗せられています。

人類はまだ核兵器の恐ろしい結果から身を守る術をもっていません。

羊の毛が刈りとられています。

皮膚の一部に特殊な軟膏が塗られていますが、これはその保護効果を試すため、ほかの部分は被ばくするようにします。

ブランディ提督は言います。

S13ブランディ提督



「したがって、軍人および軍医たちの使命は、この革命的な兵器が被ばくしていない標的に対していかなる威力をもっているか、できうるかぎり把握することです。

この実験データをえずして、軍指導部はその任務をまっとうしたことはありません。

この“クロスロード作戦”の目的は、まさにそのデータを集めることです」

S14フィルム・リポーター

避難させられたビキニ島民を代表して“ジュダ大王”がマウント・マッケンリー号の特別席に招かれました。統合作戦部隊司令官のブランディ提督が彼を出迎えています。

S15

(1946年 7月 1日ビキニでの最初の核実験のもよう)

S16スーパー

フィルム・リポーター

1949年

トルーマン大統領の下した水爆製造の英断は、全世界に大きな衝撃を与えました。新聞はこのニュースをトップで報じています。

こうしてアメリカは、原爆よりもさらに強大な破壊力を備えた兵器の開発に着手することになりました。

ワシントンでは、大統領の決定をうけ、原子力委員会が検討を開始しました。ソ連も原爆を保有したことが、この新兵器開発の引き金となったわけで、この決定にはなみなみならぬ意味がこめられています。

戦時中、原爆開発計画の指揮にあっていたレスリー・グローブス将軍が、その背景を具体的にのべています。

S17スーパー

グローブス将軍



ワシントン。 レスリー・グローブス

「率直に言いましょう。

我々は、なんとか合意をえようと努力しましたが、ソ連はかたくなに拒み、現在もなおその姿勢をくずしていません。

絶対的な強制力をもった協定により世界平和が保証されないかぎり、我々は原子力の分野で優位を保たねばなりません。

水爆をぜがひでも完成させねばならないのです。我々の子孫のために」

S18字幕（ローリング）

1953年、ソ連は最初の水爆実験に成功した。

このニュースは、アメリカの指導的な立場にある軍人や科学者たちを愕然とさせた。このときアメリカの研究は、そこまで達していなかったのである。

そこで“キャスル作戦”という一連の新しい実験が極秘に計画された。

この作戦の最初の実験“ブラボー”は、1954年 3月 1日、ビキニ環礁で実施されることになった。

“ブラボー”の主目的は、アメリカも水爆を保有していることをソ連に誇示すること、そして死の灰の影響についての資料を軍部に提供することにあった。

原子力委員会は、“ブラボー”の威力を、ビキニで実験した初期の原爆の少なくとも 500倍と推定していた。

ところがなぜか、ビキニの風下にあるロンゲラップやウトリック環礁の住民は、これまでの実験のときとは違い、今回は避難させられなかったのである。

S19

技術者

（観測船内で計器を見つめる技術者たち）

「15秒前 — 10秒前、9、8、7、6、5、4、3、2、1」

S20	(ロンゲラップの海、子供、海で子供を洗う母、ハンモックで寝る子供)
S21 スーパー	1954年 原子力委員会の宣伝映画より
技術者A	(観測船内で) 「雨の可能性はどうかね」
技術者B	「今後48時間は、マーシャル全域ではありません」
フィルム・リポーター	「ここで一言、気象についてつけ加えておきましょう。 すでにご存知のように、核実験にとって天候は重要な問題です。その成功と安全は、気象条件に左右されます。ですから実験開始ギリギリまで、念入りに気象データを検討するわけです。  (実験地域の地図の前に移動して、地図を示しながら) 特に今回の実験は、太平洋全域に死の灰が降る可能性があるので、慎重を期さねばなりません。 この地域には、約 2万人の住民に加え、実験に参加している艦船の乗組員もいます。このため実験を安全に行なうため、気象官と軍は一体となって仕事にあたっています。 ところで、この気象官たちが監視しているのはアメリカ本土よりも広大な地域で、10機の気象観測機を飛ばし、11の観測基地を設けています。これで、いかに広大な地域かがわかると思います」
S22	(観測船のデッキの人々)
技術者	「OK、爆発 2分前」
ラウド・スピーカー	「爆発 2分前です」
フィルム・リポーター	「今、皆さんは歴史的瞬間をごらんになる特別席にいます。まもなく、人類史上最大の爆発をまのあたりにするでしょう。 私たちのために、私たちの国のために、皆さんも私と同じように、この実験の成功を願っていることと思います」
ラウド・スピーカー	「爆発30秒前です。ゴーグルをつけるか、目をそらして下さい。爆発の閃光から目を守るため、10秒間はゴーグルをとったり、直接見ないように」

S23

(ヤシの皮をはぐ子供、炊事、鶏、リヤカーをひく子供、爆発、飛行機とキノコ雲、爆発、島の子供、爆発、爆風が島を襲う、ごう音)

S24 字幕 (ローリング)

1954年 3月 1日の朝、“ブラボー”の実験は行なわれた。

風は、死の灰を島々へと運んでいった。

正午には、粉雪のような灰が、ロンゲラップ島に降りはじめた。

島民への警告はなかった。子供たちは、死の灰とは知らず、絵で見た雪が本当に降ってきたと思い、そのなかで遊んだ。

そしてその夜、誰もがみな、体に異常をおぼえた。

ロンゲラップ周辺で放射能測定にあっていたアメリカ海軍の船には、死の灰を避けるよう指示が与えられていた。これらの艦船が、島民を救出することもできたはずだが、その海域からただちに離れるよう命じられた。

S25

(海岸、ヤシの木、木漏れ日がきらめく)

S26 島民 (女性)

ミツワ・アンジャイン

[ビキニの東 180キロ、ロンゲラップ島のミツワ・アンジャインさん]

「あのとき、

私は、役所の近くで寝ていたのですが、

大きな音で、目がさめたんです。

恐ろしい音でした。

“何なのあれは!”と叫んだんです。

外を見ると、空が変な色に染まっていました。

本当にゾッとしました」



S27

フィルム・リポーター

(ふくれあがるキノコ雲)

巨大な火の玉が、周辺 5キロの陸と海を包みこみ、衝撃波は65キロ先の指令船にまでおよび、しっかりと固定してあったカメラさえも、ぐらつくほどでした。

数秒のうちに火柱となり、4万メートルの高さにまで一気に上昇して成層圏に突入、キノコ雲の傘は 160キロ四方をおおったのです。

S28 島民 (夫妻)

ティマ・メリル

[ロンゲラップ島のティマ夫妻]

「あの日、

漁から戻ってくると、

妻が、

“目は痛くない?”

“空から何か降ってきたでしょう?”と言うのです。

私は、別に気にもとめませんでした。



そして、また漁にでかけました。

でも、そのあとで、カヌーにたまっている水をくみ出そうとしたら、水が黄色くなっているのに気がつきました。

その夜、私たちが食べた魚は、ちょっと苦かったです。

ココナツの汁も、ちょっとすっぱかったです。

何かおかしいなあとみんな思いました」

S29 リポーター

大気に放出された放射能は、爆発地点の風下にも被害を与えます。その度合いおよび通過コースは、風向きと風速、そして雲の状態によって決まってきます。

S30 島民（女性）

エレン・ボアス

〔ロンゲラップ島のエレン・ボアスさん〕

「実験をやったのは、アメリカ人ですが、

私たちは、その影響を調べるための実験台として選ばれたのです。

そのせいで、私たちは体の具合がおかしくなって、それ以来ずっと病気で苦しんでいるのです」

S31 リポーター

アイゼンハワー大統領と原子力委員会委員長のルイス・ストローツ提督が、ホワイトハウスに到着しました。

ここワシントンでは、恐るべき新兵器の威力と、その政治的意味について、様々な憶測がとびかっています。

S32 ストローツ提督



「大統領は、私の報告書の一部の公表を許してくれました。しかし、国の安全保障上、すべてを発表することはできません。

私は、原子力委員会の太平洋実験場から帰ってきたばかりで、一連の核実験の第2回目に立ちあってきました。

第1回目の実験の日、気象学者たちは、風向きからみて、死の灰はビキニ環礁東方に位置する小さな環礁群の北側に向かうと予測しました。

観測機は、対象地区を慎重に飛行し、船舶のいないことを報告しました。

爆弾が炸裂したとき、風は予測したよりも南側へ向かい、ロンゲラップ、ロンゲリック、ウトリックが死の灰の通り道に入りました。

その後、捜索から見逃されたと思われる日本のマグロはえ縄漁船がみつかりました。その漁船の船長によれば、彼らは、閃光を目にしたあと、6分後に爆発音を聞きました。これは、危険区域内にいたことを意味します。

したがって、死の灰の降下地域内にいたのは、日本の船員23名、気象観測基地に残っていたアメリカ兵28名、そしてマーシャルの島民 236名です。

しかしながら、実際の爆風がこの広大な地域全体に広がっていったのは、我

々の予想外でした。(訳者注: 被ばくマーシャル島民は総計 243人)

軍司令官は、彼ら全員をただちに我が海軍の設備があるクワジェリン環礁の島に避難させ、完璧な医療体制でとりこんでいます。私は先週、そこに行き、彼らを見舞ってきました。

気象官たちは、任務に復帰させてもよい状態ですが、より詳しい診察を行なうため、クワジェリンにとどまらせることになりました。

28人中、火傷を負ったものは一人もなく、島民 236人もいたって健康で、満足そうに見えました。

きょうで実験から1ヵ月経過しましたが、クワジェリンの医療スタッフによると、将来かかるかもしれない病気はもちろん除いて、現在、発病のおそれはまったくないとのことでした。

ロスアラモスとリーバモア研究所の科学者たちが、この2つの実験に期待していた成果は、十分に達成されました。これにより、我が軍は、一層強力な軍事力を確保することができるでしょう。

すでにご承知のとおり、核兵器を保有しているのが我々だけではなく現在の、この実験が、将来予想される敵の攻撃能力を十分に把握しておくためにも重要であるという点を強調しておきましょう」

S33スーパー

ジーン・カーボは、気象官としてビキニの東 220キロ、ロンゲリック環礁に配置されていた。

ジーン・カーボ

「このカードは、アメリカ被ばく退役軍人協会で、これはアメリカ放射線被害者協会のカード、そしてアメリカ退役軍人障害者協会のカードね。それからアメリカライフル協会のメンバーでもあるんだ。

これは超保守派なんて言われているモラルマジョリティーの。あとは普通のアメリカ人がもっているようなもんです。私は根っからのアメリカ人でして、下着は赤と白と青のストライプ模様だったりしてね」

S34スーパー

ラモント・ノーレイもロンゲリック環礁の気象官であった。

ラモント・ノーレイ

「あのときの水爆は、今までのなかでも一番大きなヤツだったね。

でも、司令部がその威力をどのくらいわかっていたかは、疑問だね。

つまり、紙の上に数字をあれこれ並べたて、推論をたて、“せいぜい広がったところで、お隣さん” というようなもんです。

でも、他の変動要素、たとえば上空の風向きとか、一日にうちのある時間帯における、ある地域の風向きとかを考慮に入れなければならないでしょう。

でも、そういったことまで調べる余裕がなかったとしたら、もっと慎重に、時間を選んでやるべきだったんです。

もし、誰にも害をおよぼすつもりがなかったとしたらですがね」

S35スーパー

ドン・ベーカー



S36スーパー

S37島民（女性）

ミツワ・アンジャイン



S38

S39島民（女性）

ミツワ・アンジャイン



S40

S41元気象官

ドン・ベーカーは通信士としてロンゲリック環礁にいた。

「ルイス・ストローツ提督は、爆発直後、風向きが突然東へ変わったと言っているようです。しかし、それはとうてい考えられませんね。すでに風は、東の方向に吹いていたのは、まちがいない。

ですから、彼らはマーシャルの島民たちをモルモットとして使うつもりだったんでしょう。

だって、そこはアメリカの意のままにできる状況にあったんだし、島民たちは生涯、そこで暮らしてゆくしかない。放射線による短期、長期の影響についてのデータをえるには、もってこいだからですよ」

## 第2部 影響

（空からの環礁、ラグーンをはしるカヌー）

「しばらくして、水上飛行機が降りてきて、あの人たちがやってきました。

あたりを見まわして、

私たちに、爆発音を聞いたかと尋ねるんです。ええ、私たちは聞きました。

とっても大きな音をして、

肝をつぶしました。

本当に怖くてたまらなかった、と話したんです」

（飛行機から米技術者が上陸、ガイガーカウンターでの調査風景）

「私たちは、クワジェリンにあるあの人たちの基地につれてゆかれました。

私たちのために用意されていたらしんです。

私たちは、病気だというけれど、何の病気かわかりませんでした。

あの人たちが、私たちをどうするつもりなのか、まったくわからなかったんです」

（クワジェリンにつれてこられた人々の調査フィルム）

「今さらながら思うのは、1954年 3月 1日のあの晩にでも、ロンゲラップ周辺



ジーン・カーボ

にいた船が島民たちを助けだしていれば、どんなによかったか、ということです。

あの晩、ジプシー号という名の米軍の船が、ロンゲラップとロンゲリックのあいだを通っていたんですよ。だから彼らを救出するのは、わけなかったんです」

S42ニュース・  
リポーター

水爆実験にまきこまれて被ばくした日本漁船の乗組員を診察するため、広島原爆後障害調査委員会のモートン所長が、東大病院を訪れました。鈴木院長をはじめ、みな興奮につつまれております。

爆発地点から 130キロ（訳者注：原文 480キロ）のところで死の灰をあびた 23人の漁民のうち、数名が重体です。

サンフランシスコでも、太平洋のまっただなかで炸裂した、この大爆発の被害が、話題にのぼっています。ここに水揚げされたマグロが、放射能に汚染された疑いがあり、連邦政府がガイガーカウンターで放射能をチェックしています。

日本からのマグロは、輸入前に、食品衛生係官によって特に厳しくチェックされています。本日輸入された魚は、健康に影響ないと判明しました。

マサチューセッツのディボン基地でも、核問題が注目を集めています。ここでは、国防省化学防衛学校の第1期生が、核爆発の模擬実験に参加しています。

この実験では、核爆発と同じようなキノコ雲をつくりだします。爆発の際のはこりと煙を防ぐためのマスクをかぶった彼らは、まさに近未来戦争の最前線にいるといえましょう。

S43クレジット

極秘フィルム 公開禁止

キャッスル作戦に関する国防省報告

フィルム・リポーター

キャッスル作戦は、核兵器戦をいかにたたかうかについて、より実質的な情報を提供してくれたとえます。

そのうち最も重要なのは、数メガトン級の爆弾が大気圏で炸裂すると、死の灰ができ、風によって運ばれ、数千キロ四方に致命的な打撃を与えうるという点です。

島民の住むロンゲラップ南方へ向かった放射能の雲の一部は、爆発から1時間後でガンマ線で毎時 130レントゲンに達しています。

放射性物質は、時間とともに放射能レベルを半減させながら、4時間後には毎時20レントゲンに減少しました。そして爆発地点から約 160キロのロンゲラップに降りそそいだあとも減少をつづけていました。

爆発から50時間後、島民たちの避難までに、その地点での総被ばく線量の最大値は約 175レントゲンです。これは軽い吐き気をもよおす程度で、被ばくした兵士の50%がこのレベルです。

放射能レベルは、環礁北部にかけて急速に高まり、人体に危険とされる 450レントゲンの放射線が検出された地域は、そこから16キロの範囲でした。

環礁の北部の島々では、爆発後 5時間から10時間で1500から3000レントゲンにまで達し、致死量をはるかに超えていました。

いくつかの数値をもとに地図を描くと、おおよその死の灰の降下パターンがわかります。

これが50時間後のもようです。

少なくとも危険量にあたる 450レントゲンの放射能を受けた地域は約1万平方キロ、距離にして 400キロにおよびました。これはワシントンからニューヨークまでをすっぽりおおう広さです。

(死の灰の降下パターン図を示しながら)

「これは、公表されている 6時間後の降下パターンです。これがビキニで、この図によるとどこでも毎時50ラドから 100ラドですね。毎時 200ラドから 500ラドの集中的な降下がある地域は、このあたり。

ロンゲラップは、この時点、6時間後で、どこでもだいたい毎時50ラドから 100ラドとされています。

しかしこれは、何度も言っているようにデッチあげです。

ロンゲラップやロンゲリックに降った死の灰が、この図のようなパターンを示したのは、爆発からわずか10分後だったのです。

このようなパターンをつくりあげるには、ある特定のモデルがすでに政府のコンピュータに入力されていたにちがいません。

そこに生データを打ちこめば、コンピュータは実際に起こった死の灰の降下パターンを示したはずで。

つまり、アメリカ政府は、その前日あるいは前夜の時点で、風がロンゲラップやロンゲリック、そしてウトリック方向に吹くことを予知していたのは明らかです」

S44元気象官

ジーン・カーボ



S45フィルム・

クレジット

スーパー

アメリカ代表

ニューヨークテレビニュース

1954年 7月 国連

アメリカ代表



「被ばくしたマーシャル島民とアメリカ人は、幸いにして健康を回復しました。死亡者も、重傷者も家屋の倒壊もありませんでした。

今後、マーシャル諸島において、ひきつづき核実験を行なうかどうかという問題ですが、アメリカ政府が統括している場所でのこの種の実験ができるのは、世界広しといえども、マーシャルしかありません。今回も最小限の危険で実験を成功させることができました。

共産主義者に迎合する人を除けば、答えは明白です。この地で実験を継続します。共産主義の脅威から自由世界を守る兵器の開発に最善をつくさねばならないのです」

S46新聞見出し

水爆の警告、保有は不可欠、大統領主張する

S47ニュース・

リポーター

ユナイテッド・チャーチ婦人会の全国総会において、アイゼンハワー大統領は、核兵器とアメリカの生存のため、何をなすべきかについて講演しました。

アイゼンハワー大統領



「今日、私たちは、異例ともいえる物理学の進歩をまのあたりにしています。核分裂および核融合の兵器への応用という科学的発見それ自体は、人類に危険を与えるものではありません。

しかし、他の科学の進歩と同様、それを所有する個人、あるいは集団により善とも悪ともなりえます。

この人類の最も偉大な科学的業績は、人類の繁栄と幸福をもたらすという面だけではないのです。

ですから、自由を守るものに対する攻撃を思いとどまらせるために、核兵器をつくらなければなりません」

S48看板

原子力委員会アルゴン国立研究所

フィルム・リポーター

ここシカゴで連鎖反応が確認され、すべてが始まりました。そして先週、ここアルゴン研究所を7人のマーシャル人が訪れました。

彼らは漁民ですが、私たちの常識からいうと野蛮人です。

ジョンはロンゲラップの村長です。あの白い粉が降ってきたときは、雪かと思っただけです。しかしそれは灰になったサンゴであり、高い放射能をおびていました。それによってマーシャル人たちは175レントゲンの被ばくを受けました。通常、人が一生に受けるのは20レントゲン以下だといわれています。

そこで、医学的に貴重なデータとして何人かがシカゴにつれてこられたのです。

最初に検査を受けたのは、村長のジョンでした。

“鉄の部屋”に向かう途中、ジョンは体を洗って、検査用の白い衣服に着替えました。

ジョンを野蛮人と言いましたが、彼は陽気で従順な野蛮人です。彼のおじい

さんの時代には、裸で島を走りまわっていましたが、白人がお金、宗教、そしてコプラを売ることを教えたのです。ジョンは神について知っています。とてもいい村長です。

“鉄の部屋”というのは、体内の放射能を調べるための設備です。

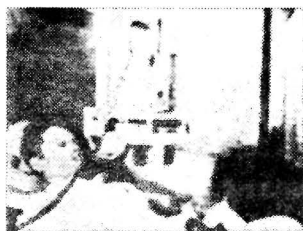
ジョンにしてみれば、初めて白人の国を訪れたからには、サンフランシスコのケーブルカーやシカゴの高層ビルや列車を見るはずだったのに、実際には“鉄の部屋”だったのです。

彼は、儀式による野蛮なやり方に慣れていません。ですから、これらも新しい儀式だと理解しています。

“鉄の部屋”に入り、なかに一人で座ります。外では白衣を着た神官が働いています。一人なかで長い時間を過ごしているあいだに、外では新しい儀式がとり行なわれていました。

すべてが興味深いものでした。一人が終わるごとに、リンゴなどの食べ物が与えられました。

7人は来るときにハワイで貸してもらったスーツとコートを着ていますが、これは帰るときにハワイで返します。そのあと、ほとんど人の住んでいない中部太平洋の島々、マーシャル諸島のウトリックやマジエロ、そしてロンゲラップに戻ります。



S49字幕（ローリング）

アメリカ原子力委員会は、今や放射能が人類に与える影響について、長期にわたる調査を行なうためのかっこうな素材をえたのである。

ウトリックの人々は、実験から3ヵ月後、環礁に戻された。島民たちは汚染された食物をとり、水を飲んだ。島民の体内には、ますます放射能がたまっていった。

ロンゲラップの人々は3年後（訳者注：3年3ヵ月後）に島に戻された。

原子力委員会は次のように発表した。“島民たちがこの島に住むことにより放射能が人体におよぼす非常に貴重な生態学的データがえられるであろう”

S50

（船に乗りこむ人々、船上の人々、荷降ろし、船から島に降りる人々）

S51字幕（ローリング）

1954年以来毎年、原子力委員会およびエネルギー省に依頼された医師や科学者たちが、被ばくした島民たちの調査に訪れている。

彼らは島民たちに環礁はもう安全だと話している。しかし、島民たちは信じていない。

S52

（飛来する飛行機、調査船、着陸する飛行機）

S53調査医師団の会話

（飛行機から降りた調査医師たちが荷物の整理をしている）

A 「それはあいさつのしかただよ」

B 「彼らは英語を話すかね？」

A 「何人かは少しね。みんな寄ってきて質問するんだけど、返事したってわかんないんだ。でもそれでいいんだ」

S54島民（女性）

ミツワ・アンジャイン

「島に戻ったとき、私は身ごもりました。

おなかが大きくなり、

予定より早く出産しました。

でも生まれたのは、表現しようのないものでした。

人間とは思われないものだったのです。

何とっていいのかわかりません。まるでみにくい内臓のかたまりのようでした。

生まれると同時に、死んでしまいました。

その後、また妊娠しました。そのときは、予定日までもったのですが、生まれた子は、1ヵ月しか生きることができませんでした。

腫れ物ができ、やけどだれているみたいになってしまったのです。

やはり死んでしまったのです。

私は、あの毒のせいだと思っています」



S55

（草野球であそぶ子供たち、道具は板切れなどだがうまくボールを打つ）

S56

〔エネルギー省から派遣された調査船リキタヌアⅡ世号〕

女性の声

「この前の検査で発見されたのですが、ガンが進行中ですね。彼女には説明していません。かたくなっています。彼女のカルテを調べてみました。小さなものですが、注意しなくてはなりませんね」

男性の声

「彼女に薬のアレルギーがあるかどうか、もう1度チェックして」

S57

科学者A

（検査台に入れられる子供、科学者が測定器の画像をさしながら説明する）

「ここにあるこのピーク。全体をみるため縮小してみたんだけど、これは人口のセシウム137を示しています。核実験によって生じたもので、半減期は30年です。

少しずつ環境中に拡散してゆきますが、大部分は放射線を出しながら崩壊して減ってゆきます。30年ごとに半分に減少するわけです。

このセシウム137は、食物連鎖によって人体にとりこまれてゆきます。マーシャルの場合は、おもにヤシの実や島にはえている植物を通じてです」

S58 (ボートで調査船にむかう人々、検査風景—老人の喉を診察する医師)

男性の声 「彼女に、このテストを前に受けたかどうか聞いて下さい」  
(マーシャル語通訳)

女性 「いいえ」

男性 「飲みこむように彼に言ってください」

S59 (海岸で遊ぶ子供)

S60 (検査風景—レントゲン撮影、血液検査)



S61 (木陰に島民を集めて、言い含めるように講義する役人)

マーシャル人通訳

「皆さんにお渡ししたパンフレットの12ページには、いろいろな種類の放射能があるということが書いてあります。

非常に短い半減期のものもあります。つまり、すぐ消えてしまうものもあるのです」

エネルギー省  
調査局長

「放射性物質の多くは、あっというまに崩壊し、消えてしまうんだ。たった数分でなくなってしまうものもある」

(マーシャル語通訳)

「ほとんどは、数日か数週間で消滅するんだよ。短半減期元素というやつだ。

ここで問題なのは、君たちの体に入りこんでしまうストロンチウムとセシウムだ。これらは、半分に減るのに30年かかる。30年が半減期だ」

S62 スーパー

リチャード・ゲリーは、ロンゲラップ島民の顧問弁護士である。

リチャード・  
ゲリー弁護士

「エネルギー省が行なった調査データを見ると、ロンゲラップとビキニの放射能値は同じになっています。ロンゲラップは、ビキニとほぼ同じくらい汚染されているのです。エネルギー省でさえも、ロンゲラップの人々に、島に住むのはさしつかえないが、食物は、すべてが食べられるわけではないと言っている

くらいです。たとえばヤングニは食べられないとか……」

S63米国が配布した  
パンフレットを  
読む島民(青年)

「放射能が人体に入る”  
“食べ物や大気を通して”  
“血液や骨、そして体のほかの部分にも到達する”  
“体内でこれらの放射能は別のものに変化する”  
“この際、アルファ線、ベータ線、ガンマ線を放出する”」

S64

(子供たちがリヤカーで遊んでいる)

島民(男性)  
ウイントン・シエル

[ビキニの東 480キロ、ウトリック島のウイントン・シエルさん]  
「私の娘は、1975年 7月 2日に生まれました。  
頭が不釣りあいに大きく、  
自分の体も、満足に動かせないまま育ちました。  
これは放射能のせいにはちがありません。

(リヤカーで遊んでいた娘を抱きあげる)  
私自身のガンも放射能のせいだと思っています」

S65島民(女性)  
ミーゼ夫妻

[ウトリック島のカールとミーゼ夫妻]  
「私自身、そして妹と、2人の息子が、  
甲状腺の手術を受けました。  
一家で4人。  
息子のことをあげれば、  
アメリカの人たちは、このウトリック島は放射能で汚染されていないと言っ  
ていますが、  
あの子は、爆弾のあとに生まれたんですからね。  
ウトリックの汚染された食べ物が原因ですよ」



S66アメリカ人女性

(観光客風、島民を集めて)  
「靴、…スチールたわし、紙ヤスリのようなものよ。大きさはいろいろあるわ。  
  
香水。……これはサンダル。いい？  
  
風船ガムを入れる袋かなにか持ってる？  
写真とってくれない？ ……3人一緒でね。  
  
赤いランプが消えるまで待ってね。半分まで押すと赤いランプが見えるから

ね、それが消えたらオーケー。

さあ、こっち来て。この娘、恥ずかしがりやね。

赤いボタン、半分まで押してね、赤いランプが消えるまで。

ありがとう。

(ポラロイド写真を見せながら)

不思議でしょう」

S67 エネルギー省

調査局長

(島民を集めて)

「医者というのはね、ここでもアメリカの病院でも同じなんだ。なにかを診察しようとするときには、ほかのところも診るんだ。それで甲状腺を診るとするだろう。医者はその人だけでなく、ほかの人の甲状腺も調べるんだ。だから、たくさんの人を診察すればするほど、甲状腺障害がたくさんみつかるというわけだよ。それは、よく診ているからなんだ」

S68 島民 (女性)

(洗濯をしながら)

「手術をしにアメリカに渡ったとき、

不安はありませんでした。

私の命を彼らにあずけ、

心配はまったくありませんでした。

安心していましたよ。

とても親切に私を扱ってくれて、安らぎすら感じました。

私は満足でしたよ。

だって手術によって、しばらくは生きながらえるんですからね」



S69 島民 (女性)

ミツワ・アンジャイン

(レコジの母)

(アルバムの写真を指さしながら)

「この写真は、息子レコジが1才のときのものです。

これも同じころのものです。

これがレコジの父親、これが私……………。

ずいぶん昔の私とレコジです。

いちばんかわいそうなめにあったのは、レコジです。

つれていかれたんですよ、あの人たちに。

レコジは放射能の病気にかかっているとされました」

S70

(海岸で子供が投網をしている)

S71 島民 (女性)

[ロンゲラップ島のタニラ・ジョルジュさん]





(子供を抱きながら)

「たくさんの子供たちが、この子のように、障害をもって生まれました。

これは絶対に、あの爆弾のせいです。

成長するにつれ、障害がひどくなりました。

他の 4、5人の子供たちも同様です。

この子は生き残りしましたが、体の障害はひどいものです。

頭は大きすぎるし、目はギョロギョロして定まりません。自分の体も思うように動かせないのです。

これは、あの爆弾のせいにはちがひありません。

爆弾の前には、こんな病気はなかったのですから」



S72

(教会に向かう子供たち、松葉杖をつく子供もいる)

S73島民 (夫妻)

ティマ夫妻

(妻がアメリカの配布したパンフレットを読む)

「放射能は人体にどのような影響を与えるか」

“放射能は毒物のようなものと考えてる人がいるかもしれない”

“しかし、放射能の原子は、毒物とは異なる”

“というのは、放射能から何かが放出されるからだ”」

「よくわからないわ」

S74ナレーション

(遺伝を解説するアニメーション)

遺伝学によれば、わずかな量のガンマ線をあびただけでも、生殖細胞の遺伝子が損傷したり、変異したりすることがわかっています。

遺伝子の突然変異は、受精を不可能にしたり、死産をまねいたりもします。たとえ生まれたとしても、さまざまな病気の誘発原因をかかえたままとなるのです。

S75

(検査風景 —— 検査器具の箱のなかの青年)

S76科学者A

(調査船の測定機材にかこまれたなかで)

「遺伝的な影響は、放射線をあびた人よりも、そのあとの世代に、より頻繁にあらわれます。放射線をあびた最初の世代では、遺伝子の損傷の4分の1が死産などでとり除かれ、4分の3があとの世代に影響をおよぼします。

自然界では、ある一定の割合で遺伝的变化が起こっていますが、その影響は子孫にはっきり出てきます。この自然発生の割合は、あるレベルの放射線によって倍加されます。人間の生殖細胞では、この倍加をひき起こす放射線の強さは、私の記憶に間違いなければ、たぶん 100レムぐらいと考えられています」

S77島民（夫妻）

ティマ夫妻

（妻がアメリカの配布したパンフレットを読む）

「“ 胎児のまま死ぬこともある”

“ 障害をもって生まれることもある”

“ それには身体障害と知能障害とがある” 』

S78

（寝たきりの障害をもった子供、寝返りをうつ、家から見える外の光景）

S79ナレーション

（遺伝を解説するアニメーション）

放射線が両親から受けついで健全な遺伝子のいくつかを変化させたり、突然変異を起こさせたりすると、これは胎児の形成を決める設計図が変わってしまったことを意味します。

生まれてきた子供は、傷ついた設計図を、あとの世代に次々と伝えてゆくことになります。

こうしたことが起こると、たまたま結婚した 2人ともが、同じように変異した遺伝子をもっている可能性が、次第に高まってゆきます。

どの細胞にも、何千もの遺伝子があり、それらが生まれてくる子供たちをつくる設計図となっているのです。

S80 島民（女性）

エレン・ボアス

「悲しいです。私はアメリカ人を恨みます。

こんなとんでもないものをつくり、

私たちの島で実験をしたアメリカ人を。

そう、この島で、

人々を傷つけたアメリカ人を。

私は、ひどく被ばくしたうちの一人です。

放射能で火傷を負い、

今もぐあいが悪いままです。

体がおかしいと感じていますが、

私には説明できません。

だって医学用語は知らないし、

それに私の生活にはまったく無関係だったんです。

この放射能と呼ばれるものは」



S81島民（夫妻）

ティマ夫妻

（妻がパンフレットを読む）

「“ マーシャル諸島の島民にガンがみられるとしたら”

“ 放射能をあびた者にしろ、あるいは今後あびるかもしれない者にしろ”

“ そのガンは、世界の他の地域でみられるガンと変わりはない”

“ ガンにかかったとしても”

“放射能が原因かどうかは、判別できないのだ”」

S82島民（男性）

ジョン・アンジャイン  
（レコジの父）

[被ばく当時、ロンゲラップの村長をしていたジョン・アンジャインさん]  
（写真アルバムをひろげながら）

「彼らは私たちを国連ビルの見学につれてゆきました。

これは国連総会です。

これらの写真はすべてニューヨークでとったもので、

これは、ロングアイランドにある原子力委員会の病院。

この写真は息子のノドを検査しているところです。

これもです。

どれもこれもニューヨークとロングアイランドでとったものばかり。

これが、私が話していた“鉄の部屋”です。ここで骨のなかの放射能を調べます。

これは、彼らがレコジを首都ワシントンにつれていったときのものです。  
病院はメリーランドにありました。

これは死んだとき、棺桶に納められたレコジです。

葬儀場の外で立っている私です、ワシントンでね。

これは、ロンゲラップで彼を埋葬したときので、  
墓に入れてあげました」

（“鉄の部屋”にむかうジョン・アンジャイン）

S83島民（女性）

ミツワ・アンジャイン  
（レコジの母）

「レコジがわずか19才のときでした、

私たちがあの子の放射能病を知ったのは。

あの子は、アメリカにつれてゆかれました。

大きなアメリカの病院でした。

そこでの検査、……それはもう詳細にわたるものでした。

でも私には、……彼らがレコジを、まるで動物のように扱っていたように思えました。

レコジの体を次から次へと刺して、

ニワトリでも切り刻むかのようなでした。

レコジの体に突き刺された器具から、血が流れていました。

まるで実験動物みたいでした。

私は一部始終をこの目で見ました。……胸を引き裂かれるようでした。

彼らがレコジをモルモットのように扱うのを見ました。

それが心に焼やきついて離れません。……私の息子をめちゃくちゃにしたんです。

虫けらのように、扱って……。

これが私には決して許せません。

そういうことです」

S84

(調査船から島にむかうポート)

S85元気象官

ラモント・ノーレイ

「彼らが意図的にやったなんて思いたくないですよ。……でも、あとからわかったことを総合すると、そうとしか考えられないのです。結論はたったひとつです。

その場所で、その時間にどういう風が吹きやすいか、彼らが知らなかったはずがないし、

そこに何ヵ月もいて、以前に行なわれた実験の記録をもっていたのは明らかなんですから」

S86元気象官

ジーン・カーボ

「彼らは死の灰の降下パターンを知っていました。死の灰がどこにいくかもわかっていました。でも、そんなことは百も承知で、危険を冒して実験を行なったんです。

実験したその日のうちに、島民たちを避難させることもできたのに、彼らはそうはしなかった。我々もウトリック島の人々も避難させられなかったのです。

だとすれば、アメリカは、放射能が人間におよぼす影響を研究するためのモルモットを必要としていた、としか考えられません。アメリカがそれを承知で実験を行なった確かな証拠もあります」

S87ビキニ島民の弁護士

ジョナサン・

ウィスガル

「ブラボー実験の犯罪、私はあえてこの言葉を使わせていただきますが、それは、アメリカ政府が人の住む島に風が吹いているのを知っていた、ということにあります。風向きの変化を予測できなかった、というのはウソです。

最近公表されたエネルギー省の文書によると、実験前日午前11時の気象報告では“死の灰が人の住む地域に降ることはない”とされていました。

しかし、その日の午後6時までには、風は悪化しはじめていました。それでも実験の決行を再確認したのです。

しかも文書によると、その夜中12時の報告では、“風は悪化し、毎時3キロから7.5キロであった”といえます。

もし 6キロの風速なら、これも文書にある言葉ですが、“風は東のロンゲラップに向かい” “ビキニ環礁のビキニ島とエニニュー島が汚染されるであろう”とされていました。

つまりアメリカは、国連から信託された島と人々を汚染すると充分承知のうえで、実験を遂行したのです」

S88

(島の子供たちがテレビでアメリカ映画を見ている)

S89

(テレビから)

フレッド・シーダー

「マーシャル諸島共和国の皆さん、私はレーガン大統領の特使、フレッド・シーダーです。ここにアメリカ大統領をご紹介できることを、たいへん光栄に存じます」

レーガン大統領



「この歴史的な出来事にあたり、ミクロネシアの友人の皆さまにごあいさつを申し上げます。アメリカと信託統治領の人々は、長いあいだ特別な関係を結んできました。

信託統治が始まってから今日まで、私たちは皆さんをアメリカの家族の一員としてむかえ、敬意をはらってきました。

そして今、皆さんは成長し、家を離れ、自立しようとしています。皆さんが内政と外交を、とどこおりなく治めるよう、期待しております。

自力で経済発展をなすとげ、主権国家として歩まれますよう、望むものであります。

私たちは、新生国家となられた皆さんと、今後とも密接な結びつきを保ちたいと願います。

私たちがともに築きあげてきた最も価値あるもの、それは道路でも、空港でも、学校や病院でもありません。それは民主主義と自由と民族自決の精神です。あなた方は、将来への強力な礎を築いたのです。

自由連合のもとで、私たちはともにより良い生活を築くことができるでしょう。

ありがとう。おめでとう」

S90島民(女性)

ミツワ・アンジャン

「アメリカ人は、知らないのでしょうか？」

どの命も大切なものであることを。

ちゃんと教育を受けている人たちなのに。

人ひとりの命はどうでもいいと本当に思っているのでしょうか？」

いったい何を考えているんでしょう？」

自分たちを利口だと思っているんでしょうが、実際は頭がおかしいのです。

S91字幕（ローリング）

愚かな行為に関しては利口ですけどね」

最近の調査は、マーシャル諸島の放射能が、公式見解よりはるかに危険であることを示している。

当時ロンゲリック環礁にいた気象官たちは、マーシャル諸島の人々と同じ病気で苦しんでいる。

ロンゲラップ環礁の人々は、放射能の影響を恐れて、故郷の島を離れた。

国連、そしてアメリカ議会では、マーシャル諸島の人々の窮状にどう対処すべきか、今なお討議がつづけられている。

S92スーパー

1954年の水爆実験のフィルムを見たあとの議員たち

議員 1

「アメリカ政府とその国民は、人類の歴史のなかで、最も恐ろしい責任をもっているとは思う」

インタビュアー

「どう思いますか？」

議員 2

「まったく驚いた。ジャビック氏と同じように感じざるをえない。ぞっとする出来事です」

議員 3

「びっくりしました」

議員 4

「ほんとに驚いた。とてもショックでした。まだそのショックから立ちなおっていない」

議員 5

「恐ろしい！」

議員 6

「非常に教えられた」

議員 7

「まったく恐ろしい！」

議員 8

「非常に教えられる映画だ。もし核戦争が起こったらどんなことになるかわかるというものだ。そんなことは避けねばと思うがね」

議員 9

「非常に関心をそそられました」

議員 10

「人間がどんなちっぽけな存在か、考えさせられます」

S93エンディング・  
クレジット

監督・脚本 DENNIS O'ROURKE  
フィルム編集 TIM LITCHFIELD  
記録フィルム調査 DAVID THAXTON KEVIN GREEN  
録音 MARTIN COHEN GARY KILDEA  
ミキシング JULIAN ELLINGWORTH  
録音編集 RUTH CULLEN TIM LITCHFIELD  
スチール DENNIS O'ROURKE  
共同製作 MARTIN COHEN LAURENCE J. HENDERSON  
DAVID THAXTON  
製作 DENNIS O'ROURKE  
音楽 "Twiligh Echoes" 編曲・演奏 BOB BROZMAN  
"交響曲No.5 作品47 Dmitri Shostakovich"

このフィルムは、1954年の出来事に関し、現在、そして今後マーシャル諸島を訪れる医師や科学者の責任を追及するものではない。

【ハーフライフ（半減期）】日本語版

語り 花崎撰、及川均、木村良夫（黒色テント68/71）  
翻訳協力 三輪妙子（翻訳家）、土井くにご（築地書館）  
豊崎博光（フォト・ジャーナリスト）  
鈴木真奈美（地球の友）  
製作協力 呉徳洙、田口知洋、清水千恵子（OH企画）  
成沢富雄、横田桂子（黒色テント68/71）  
星野敏昭（セントラル録音）  
横浜シネマ  
印刷協力 アテネ社、トライプリントショップ  
日本語版製作 反核パンフィックセンター東京 1987年5月  
〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内  
☎ 03(815)1648



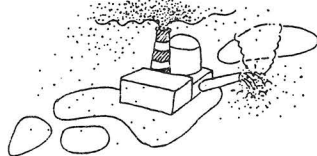
# ★スライド完成★

## それでも 原子力発電を 選びますか？

原電に関する入門スライドをつくりました。  
チェルノブイリ原発事故について、放射能について、核のゴミについてなど、原電のこわさと原電はいらないということをし、わかりやすく説明。好評のリーフレットのスライド版。  
80コマ、30分(ナレーション・カセット) 頒価1セット2万円、貸出料1回3000円

### [内容]

1. 国境を越えた放射能
2. からだをむしばむ放射能
3. 日本の原電は大いしょうふか?
4. たまりつづける核のゴミ
5. 原電はいらない
6. 原電はとめられる



### 記録映画

#### 原発切抜帖 (青林舎作品)

時代の証人としての新聞をとおり、広島から現在の原発大国ニッポンまでを小沢昭一さんの語りてたどる。  
カラー16ミリ45分 貸出料1回1万円

世界は恐怖する (1957年日本ドキュメントフィルム作品)  
クールかつ克明な生物観察と放射能の記録フィルム。  
16ミリ白黒1時間20分 貸出料1回1万円

### 展示用写真パネル

#### 原発樋口健二

日本の原子力発電所をめぐる写真ドキュメント。  
貸出料1回3000円

### カラースライド (製作:反核パシフィックセンター東京)

#### 原子力——その隠された実態

米国の海洋投棄で放射能が漏れ出したドラム缶の水中写真など、生々しいカラースライドが原発の恐怖を写し出す。  
82コマ約40分 頒価2万円、貸出料1回5000円

#### 第5福竜丸のむこう側

##### マーシャル諸島の被爆者

米国の核実験場とされたマーシャル諸島からの報告  
96コマ40分 貸出料1回5000円

#### 核のゴミ野放し法案をつぶそう

##### 原子炉等規制法改定ここが問題だ

原子炉等規制法改定の危険性について知ってほしいと製作したもの。86年のこの法律改定は、日本の核廃棄物政策を根底から大転換させる危険きわまりないものであった。

70コマ20分 頒価1万8000円、貸出料1回3000円

# 月報 反核太平洋 パシフィカ 特集号

## [全記録]

### 核のない太平洋をつくりだそう 3・1 東京集会 反核独立太平洋の日 '86

頒価600円(送料50円)

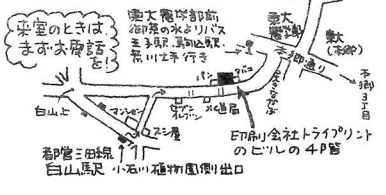
なぜ反核太平洋なのか? 私たちが「反核パシフィックセンター東京」としてスタートを切った86年3・1集会の全記録。ぜひ読んでほしい一冊。



## あなたも参加しませんか

反核パシフィックセンターの活動にかかわろうと思う人はいませんか? そうを、毎週土曜日に事務所にお立ち寄り下さい。ただし人手不足で、事務所がないときが多いので、前もって電話をください。  
毎週水曜日夜に定例会をえています。

仲間求め





新刊

書店にこみかめくた  
さいもまたセンターと  
も目取換ってしほすじ送  
料250円)

放射能におおわれた島  
島には放射能の汚染が... 1985年の夏...  
放射能汚染は人間の居住には安全だとしても、その水産物は地球上の人の住むいかなる地域よりも高い。この島に人が住むことは、人体への放射能に関する貴重なデータを提供するであろう。コナド爾島、アメリカは、放射能汚染をモルモットにして、生体実験をはじめたのである。一本文より

豊崎博光

GOOD-BYE RONGELAP

グッドバイ  
ロンゲラップ

1冊5頁 写真57点 和英文  
定価=1500円

築地書館



反核太平洋  
絵ハガキ

言葉くはもの  
のために

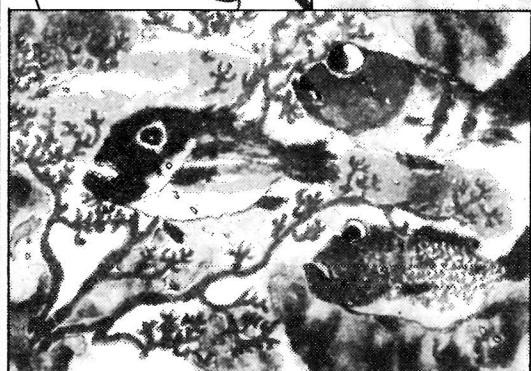
1セット 分価 300円  
(4枚1組、カラー)



▲カトーコトマル画



▲嵩山妙子画



▲丸木俊画



▲丸木俊画

▶日本語とともに英語もついていて海外にも広げてください。

- ▶ハガキをとおして「核のない太平洋」と「脱原発社会」におけるメッセージを伝えてゆきたいと思いつくりました。
- ▶糸会ハガキの売りあげは「反核パシフィック基金」として太平洋の人々との交流、資料・情報の収集などに使われます。

●申し込み・連絡先●

反核パシフィックセンター 東京または、水戸子たかし 〒355-03 埼玉県比企郡小川町増尾52 ☎0493(74)0584

郵便振替口座：東京5-159424(反核パシフィック基金)

『パシフィカ』1987年4月10日発行(毎月10日発行)  
第8期 第4号(通巻162) 1975年8月20日 第3種郵便物認可



a film by  
Dennis O'Rourke

## HALF LIFE

Editing TIM LITCHFIELD Photography DENNIS O'ROURKE  
Music BOB BROZMAN Film Research DAVID THAXTON · KEVIN GREEN  
Associate Producers MARTIN COHEN · LAURENCE J. HENDERSON · DAVID THAXTON  
Written and Directed by DENNIS O'ROURKE

Production Company O'ROURKE & ASSOCIATES - FILMMAKERS

©copyright

月報

反核太平洋

# パシフィカ

公害逃走! 改題

1987年4月特集号

▶ 編集・発行

反核パシフィックセンター東京

〒113 東京都文京区向丘1-3-7 自主講座内

☎ 03(815)1648 郵便振替口座:東京3-168332

(口座名:反核パシフィックセンター東京)

▶ 頒価 400円

▶ 送料50円

▶ 年間定期購読料4000円(送料こみ)